

体験から学ぶ 知恵と技

地域の担い手を応援する 林研活動情報集

平成30年度 多様な担い手育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

体験から学ぶ 知恵と技

地域の担い手を応援する
林研活動情報集

平成30年度 多様な担い手育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

まえがき

いま、全国の林業現場から担い手が不足しているという声を聞くようになりました。林業の持続、発展のためには有望な人材は不可欠ですから、私たち全国の林業研究グループメンバーにとって、林業を担っていく人をどう育てるか、どう確保するかが大きな課題といえるでしょう。例えば、林業の仕事の魅力を若い人たちに伝え、就業希望者のすそ野を広げたり、学びの場、現場のノウハウ提供等を通じて学校の林業教育を支援するなど、私たち林研だからこそできる活動はあるはずです。

私たち林業研究グループメンバーをはじめ全国の仲間たちは、これからの林業を支える人材育成に寄与するため、一丸となって全国キャンペーン運動を繰り広げてきました。昨年度に引き続き、地域の林業後継者や将来を担う未来の就業者、新たに林業に就業したい人々、そして女性に向けたさまざまな支援活動です。

今年度の全国キャンペーンでは、全国の林研グループ等がリーダーシップを発揮し、次のような活動を実施してきました。

高校生や大学生など若い層を対象としたインターンシップ、林業経営・就業体験、林業技術研修などです。林業機械、ICTから安全作業の工夫などを実践的に学ぶ場で林研グループが支援し、技術のしくみ、森を育て、木材を生産する林業という仕事の魅力を心に刻んでもらうことができました。

また、女性の林業就業を支援する活動も全国に広がりました。体力面での男女差を考慮する中で、林研グループの活動から、安全に、無理なく働ける就業環境づくりの工夫やアイデアが生まれ、男女共

通の魅力ある職場づくりへ寄与する成果も生まれています。

このような全国での支援活動は、私たちの仲間だけで実行できるものではありません。高校や大学等、地域の教育関係者、そして技術指導などを支援する林業関係者の方々の理解と協力を得て、はじめて効果のある活動づくりが可能になります。

さらに本書は、後継者の育成支援、林業就業促進支援等はもちろん、林研グループ等の活動、さらには地域の仕事創出支援に欠かさない生産技術や流通・販売ノウハウを実践事例から紹介しました。机上では得られないノウハウ、ヒントの数々が盛り込まれています。活動を振り返り、また今後の全国キャンペーンをいっそう実り多いものにするために、ぜひ本書を役立てていただければ幸いです。

本書の取りまとめに当たりましては、林業関係高校、大学等教育機関、都道府県林業普及指導員、市町村、森林組合、森林所有者のみなさん、全国林業改良普及協会ほか、大勢の方々のご協力をいただきました。深く感謝いたします。

平成31年3月

全国林業研究グループ連絡協議会

会長 齋藤 正

平成30年度 多様な担い手育成事業

まえがき…………… 3

第1部 地域の森林で林業技術体験活動

見る・聞く・体験する

林家から学ぶ林業の仕事

庄内林業研究会「山形県」…………… 8

下刈りで赤城の森に

高校生パワーがこだまする

NPO法人フォレストぐんま21「群馬県」…………… 12

レーザーコンパスで樹高計測、

チェーンソーで丸太輪切り体験

砺波地区林業研究グループ協議会「富山県」…………… 16

林研・高校・森林組合が連携

高校生の林業職場体験

三重県林業研究グループ連絡協議会「三重県」…………… 20

森林・林業の担い手育成につなぐ

高校生のチェーンソー・林業機械体験

かみやま林業振興会「徳島県」…………… 24

高校生の間伐体験。チェーンソー操作、

伐倒、牽引ロープ・かかり木処理

黒木町林業振興会「福岡県」…………… 28

大学生の林業就業体験
クヌギ林整備からシイタケ生産まで
大分県林研グループ連合会「大分県」…………… 32

体験学習運営に向け、安全・技術を向上
女性部の刈払機研修と安全衛生講習会
たぐいわ館岩地区林業振興協議会「福島県」…………… 36

第2部 山のスモールビジネス

女性グループの「食づくり」編…………… 42
グループ活動の「クラフト」編…………… 49
編集部

第3部 私たちのチャレンジ！ 人づくり、モノづくり、山づくり

会員参加への呼びかけ、

稚樹の苔玉づくり、アロマ香水

飛騨フォレストレディース「岐阜県」……………58

浄法寺漆の安定供給に向けて

浄安森林組合青年部「岩手県」……………60

定年退職後に故郷で林業に目覚める

頸北林業研究会「新潟県」／古澤俊朗さん……………62

父の背中を追って夫妻揃って山へ

多賀町林業研究グループ「滋賀県」

／小森啓之さん・奈巳さん夫妻……………64

新たな特用林産物「ウバユリ」の研究

佐賀市婦人林業研究会「佐賀県」……………66

里山の除伐材で木工体験

峡北地区林業研究会「山梨県」……………68

富原やまんばあば／里山の宝探し

富原婦人林業研究クラブ「岡山県」……………70

アートと林業 森へいざなう林研活動

河北郡林業研究グループ「石川県」／松本拓也さん……………72

よりリアルに！ 小学生の測樹・間伐体験

五城目森林組合林業研究グループ「秋田県」……………74

林研会員のお手本として活躍中！

与謝地方林業研究会「京都府」／吉岡徳雄さん……………76

平成30年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧……………78

第1部

地域の森林で
林業技術体験活動

事

インターンシップ

例

見る・聞く・体験する 林家から学ぶ林業の仕事



活動を終えて笑顔の生徒とメンバーたち

荒廃林をなくすために

山形県北西部の日本海側に位置する庄内地域は、西側を日本海に

庄内林業研究会「山形県」

面し、他の三方を鳥海山、月山、朝日連峰に囲まれた、森林・平野・

海岸を有する自然豊かな地域です。

この庄内地域の森林から「荒廃林

をなくすこと」を目的として、平成19年に地域の林家が中心となり、庄内林業研究会（以下、庄内林研）が発足されました。現在では林家以外にも集い、メンバー数も27名まで増加してきました。

庄内林研の活動の具体的な内容ですが、メンバー同士の勉強会、また、山林を活用する意欲はあるものの、どうするべきか悩んでいる森林所有者を対象に「休日林家支援」の開催、さらに高校生を対象としたインターンシップの実施や、林業イベントで「きのこの植菌体験」を開催するなど、地域住民が林業への関心を持つきっかけづくりを行い、地域振興に携わっています。

さらに最近では、研修会講師や都市部への山菜出荷を行うなど、多種多様な活動にも挑戦しています。

今年度に生かされた3年間の
インターンシップ実施

◆森林組合は経営紹介や機械実演
林研は林家の仕事紹介

平成27～29年の3年間にわたり出羽庄内森林組合と共同で、山形県立鶴岡工業高等学校環境科学科の1、2年生、毎年2名程度を対象に、インターンシップを開催しました。3日間の日程のうち出羽庄内森林組合は、素材生産業者としての林業経営についての紹介や、高性能林業機械を使った林内作業の実演などを担当しています。

一方で庄内林研は、個人の林家が行っている仕事の紹介や、林家のこれまでの活動経緯の説明など、事業体では体験できない内容を入れるよう努めてきました。

昨年度のインターンシップでは、まず、林業で使う道具の使い方や手入れの方法について説明しました。林業は危険を伴う産業であるため、道具を正しく適切に使用してもらい、作業を行う上での安全確保の大切さを認識してもらうことが目的です。鉋や鋸はもちろん、チェーンソーなどの機械について



生徒たちに自己紹介と意気込みを発表してもらう。
やや緊張した面持ち

うことがわかり、安全管理の大切さについて実感した」と体験後の日誌に書いていました。

◆林家の話から林業の現状を学ぶ

また、外での活動だけでなく、長年林業に携わってきたメンバーとの意見交換も行いました。そのなかで、地域の林家の現状や林家として自分がやってきたこと、林業をやるうと思ったきっかけなど、メンバーが体験談を話しました。

具体的には、まず、地域の林家

も詳しく説明しました。
次に、熟練のメンバーが林業施業の様子を見せ、それをお手本に高枝鋸を用いた枝打ちやチェーンソーを使った玉切りの体験を行ってもらいました。

昨年度の生徒たちは、林業についてある程度は知っていたものの、山仕事はきつそうなので、進路として選ぶ予定はないと考えていたようです。「インターンシップを通して、林業は大変な仕事だが、森林のありがたみや、林業が楽しいものであることがわかった。また、危険を伴う仕事であつてもやり方次第で安全にしていけるとい

の現状として、熟練の林家が技術を後世に伝えられないまま引退してしまうケースが多いこと。さらには、林業は教育課程で触れる機会が少なく、手作業、きついという昔ながらのイメージがそのまま残っていること。そこで、林業を知ってもらい、技術や知識を伝える機会を設けるために休日林家支援やインターンシップといった林研活動が必要だと熱く思いを語っていました。

また、定年後から林業に取り組

んだというメンバーもいて、やる気があればいつでも林業は始められるとも言っていました。

林業従事者の高齢化の現状を若者に知ってもらうにはどうすればよいか、メンバーが知り合いの学校の先生に相談したことから、このインターンシップが始まりました。

ゼロからのスタートだったので、始める際には共催する企業との提携、学校への説明、参加生徒募集、場所の確保、実施内容の検討などやることが多く、苦労もありました。

参加生徒を募集する

際には、あまりハードルが高くないように、林業に興味があつたり、就職を考えていたりする生徒を募集しています。この3年間で実際に2名の就職へと結びついたこともあり、有意義な活動であるとメンバー一同実感しています。就職を前提とした活動のため、就職先となる森林組合

との提携を取りつつ、できる限り続けていく予定です。

今年度は見て・聞いて・体験する、をメインに

林業は教育課程で触れる機会が少なく、誤ったイメージを持っている高校生も少なくないというところから、今年度は多くの高校生に林業を知ってもらい、興味を持ってもらうことを目的として、インターンシップよりもハードルを下げた形で1日完結型の林業体験実習を実施しました。



いろいろな道具の説明を聞く生徒たち

安全防護をしっかりと



◆道具の紹介

活動内容はインターシップと

山形県立酒田光陵高等学校環境技術科で参加を希望した1年生9名を対象に、林業とはどのようなものか、見て、聞いて、体験してもらい、楽しく活動を終えることを目標として実習を行いました。実習に先立ち、まず行ったことは、生徒たちの自己紹介と実習にかけの意気込みの発表です。林業は初めてで心配だが、怪我のないよう頑張りたいという生徒が大半を占める一方で、将来は林業に関わる仕事に就きたいので、しっかりと勉強していきたいと、進路を見据えた生徒も一部見られ、林に入る前からやる気を感じられました。

◆安全最優先

ほぼ同じで、道具の紹介、枝打ち体験、玉切り体験などを行いました。インターシップよりも体験してもらおう」ことに重点を置いて進めていきました。道具の紹介の際には、鋸や刃物、チェーンソーだけでなく、運材用のトビや梯子、輪尺など、木を伐る以外の道具の紹介も行いました。道具を間近で見、触れてもらい、感覚や重さも体感してもらいました。

次に林内での体験ですが、体験に入る前に、仕事のやり方についての説明を行いました。特に安全面につ

いては、林業では刃物を扱う機会が多いことや、伐った木や枝が落ちてくること、斜面で作業を行うことがあることなど、リスクを伴うことがあるということを説明しました。

具体的な作業ですが、昨年度に伐られ



人力で丸太を運ぶ生徒。材の重さを体感する



トビを使っての運材。パズルを解くようだという感想も聞かれた

もありました。

◆伐倒、枝打ち、玉切り

次に枝打ち、玉切り体験ですが、これは昨年度のインターシップと同様の作業を行ってもらいました。今回はこれに加えて、代表生徒に樹木の伐倒作業も体験してもらいました。混んでいる林内の難しい伐倒であったにもかかわらず、受け口、追い口をきちんと作り、クサビを使って安全に気をつ

てきた木が林内に放置されていたので、まずは林内の材の整理を行い、林のなかをきれいにしてもらいました。今回はトビを使って材を運ぶ作業だったので、まずは人力だけで木材を運んでもらい、道具の有り無しや工夫次第で作業が楽になることを体験してもらいました。丸太の上で丸太を転がしていく作業を行った際には、パズルを解くようで頭を使



チェーンソーを使った初めての伐倒体験、
難しい状況ながら問題なく伐ることができた



受け口の作り方を確認する生徒たち

けながら、かかり木にならず
にきれいに伐ることができま
した。

◆林業という仕事を考える

実習の最後には、林業とい
う仕事について、これから考
えてもらいたいことを説明し
ました。荒廃林が増えている
ことや後継者不足であること、
今回の現場とは違った高性能
林業機械を使った作業のこと、
特用林産物の活用など、多岐
にわたることを説明しました。
これらの活動を通して、参
加生徒全員から感想を發表し
てもらい、活動を終了しまし
た。

徹底した安全管理と 早めの計画実行が大事

今回の林業体験実習では、
3年間のインターンシップで
培ってきたノウハウを十分に
生かすことができ、初めての
企画ではあったものの、実施
が決まってからは比較的スム
ーズに進めていくことができ
ました。しかしながら、体験

活動をメインにする
ということ、危険
を伴う活動が増えて
しまったということ
もありました。それ
に対しては、作業者
の間隔に気を配った
り、いつもよりゆっ
くりと作業をしたり、
少しでも危険がある
場合には、防護具を
着けてもらったりと、
生徒や指導者の安全
管理を徹底すること
で、リスクを減らす
よう努めました。

また、学校の予定

が前年度から決まってしまうてい
うことで、インターンシップと同
様に参加生徒の募集に苦戦したこ
とがありました。学生の参加を前
提とした企画の場合には、早めの
計画を立てて進めていくことが大
切だと実感しました。

今後の活躍に期待して

庄内林研は今年で発足から11年
を迎え、これまで蓄積したノウハ
ウを生かしながら、新しい活動の



防護衣装着で、熟練メンバーの指導を受けながら玉切りする生徒

実施へと結びつけてきました。今
後も、様々な活動を実施しつつ、
庄内地域の森林・林業の未来のた
めに、活動を続ける「庄内林業研
究会」の更なる活躍が期待されま
す。

*まとめ

山形県庄内総合支庁森林整備課

事

インターンシップ

例

下刈りで赤城の森に 高校生パワーがこだまする



慣れないながらも下刈り作業に精を出す生徒たち

森林ボランティア団体です。

理想の森づくりに向けて、手入れの遅れた森林を対象に年間100日前後の活動を行っており、これまで群馬県知事賞や農林水産大臣賞、環境大臣賞など数々の賞を受けています。

「毎週のようにどこかの森で森林整備や普及活動などを行っており、ちよつとやり過ぎかなと思っ
ているんですよ（笑）」と語るの
は菊川理事長。建設機械メーカー
を退職後、森林ボランティアにど
つぷりと浸かつており、精力的に
活動に取り組んでいます。

現在、正会員は個人60名、法人
1社。賛助会員は個人8名、法人
11社です。

フォレストぐんま21の活動は実
に多彩ですが、大きくは1. 森林
整備事業、2. 普及啓発活動、3.
青少年育成事業、4. ネットワー
クの構築の4分野に分けられます。

3番目の青少年育成事業では、
高崎観音山周辺の「子供達の山仕
事」や横浜並木小学校体験学習の
応援などがありますが、ここでは
群馬県立前橋工業高等学校（高田
勉校長、以下、前橋工業）の林業
体験について紹介します。



NPO 法人フォレストぐんま 21 の
菊川熙英理事長

前橋工業高校の 林業体験を応援

前橋工業の林業体験は、平成30
年度は8月20日（月）に行われま
した。場所は赤城山麓にある国立
赤城青少年交流の家に隣接してい
る山です。

ここは平成15、16年に当時の前
橋工業高校生がクリなどを植林し
たところ。もう今ではりっぱ

プロ顔負けの 実践技術者集団

群馬県のNPO法人フォレスト

NPO法人フォレストぐんま21「群馬県」

ぐんま21（菊川熙英理事長、以下、
フォレストぐんま21）は、プロ顔
負けの実践技術者集団として、平
成9年に県内で最初に創設された

に大きくなった木がある一方で、枯れたり下刈りの誤伐や獣害にあったりで補植したものもあるので、まだ下刈りは不可欠の状態です。フォレストぐんま21は、10年ほど前からこの下刈りの応援を担っています。

「当初は赤城塾という森づくりの団体が担っていたのですが、会員は多いものの実践的な技術をマスターしている人が少ない。いわゆる指導者がいないために、我々のところにSOS、救援を求めてきたのが協力するようになった発端です」と菊川理事長。

植林地はまだ人の背丈を超えるシノダケが繁茂していて立ち入るのが容易でないことから、林業体験前の8月4日に受け入れ準備を行いました。

40度近い猛暑日でしたが、フォレストぐんま21のメンバー10名のほか、赤城塾1名、交流の家1名、赤城南麓森林組合1名が参加して植林地までの下刈り作業を行いました。通路を確保して生徒たちが植樹した樹々まで容易に辿り着けるようにするためです。

雑草も恐れをなす!! 高校生パワーの下刈り

林業体験の当日は、前橋工業生徒23名と引率の教諭4名が参加しました。サポートはフォレストぐんま21のメンバー11名のほか、赤城南麓森林組合2名、赤城塾1名です。

9時、生徒たちがバスで国立赤城青少年交流の家に到着。すぐに下刈り鎌の安全な使い方や作業上の注意点などの説明をした後、生徒を4班に分けて作業に取りか



まず国立赤城青少年交流の家で作業の説明をする

りました。慣れない手鎌を持った高校生ですが、一生懸命に下刈りを行いました。休憩をはさみ約2時間の間、ふだん静かな赤城青少年の森は若い人たちの声がこだましました。若いだけにその活力はさまざま、若さだけでなく、雑草は恐れ入った

のか平伏しているような様子もないではありませんでした。植樹された樹々は暑苦しい草に覆われていましたが、生徒の頑張りで涼しげな姿に変貌しました。

仲間と木登り、スイカのタネ飛ばしも

作業が終わりに近づいたころ、ある生徒が木に登り始めました。初めての木登り体験だそうです。その第一声が「こんな世界は見たことがない。世界制覇ができそうだ!」。1人が登り始めると次々



下刈りの後はちょっと木登り体験も。風景も世界も変わる



下刈りの後に勢揃いした前橋工業の生徒たち

と登り始めましたが、菊川理事長は「生徒たちは視点を変えようと風景も世の中も違って見えてくることを実体験したのではないでしようか」と言います。

汗を流した後は青少年交流の家に戻り、冷えたスイカをご馳走になりました。ここではスイカを頬張りながらタネ飛ばし競争に興じる生徒もいました。

仲間と木登りにスイカのタネ飛ばし。暑い中での下刈り作業とともに忘れられない思い出になることでしょう。

ボランティア精神や 草木を大切に 気持ちを

この林業体験を引率した先生の1人、前橋工業の飯田雄貴教諭は次のように語ります。

「バス1台に乗れる人数の範囲内で、生徒会の役員やボランティアクラブを中心に全学年から有志を募って参加しています。

生徒は慣れない作業なので大変な面もありますが、この林業体験を通じてボランティア精神や集団性、社会性を養うとともに、草木

を大切にする気持ちも養われているのではないでしようか。来年は下刈り機械を使つての体験も検討してみようとの話も出ています」

また、この林業体験はフォレストぐんま21のメンバーにも刺激になっているようです。

菊川理事長は「当会はおじちゃん为主体になっているグループです。そのおじちゃんにとって高校生は孫のようなもので、そんな若い人たちの作業が楽しいと思っているメンバーが多いんですよ」と言います。

この林業体験は世代間の交流の場にもなっているようです。

竹林の整備や竹炭の 活用にも取り組む

ところで、フォレストぐんま21は最初に紹介したように実に多くの活動が続けていますが、主になるのは森林整備です。

森林整備では、河川整備や林道整備、公園整備の他に、企業の森づくり（群馬県トラック協会、監査法人トーマツ、富士通など）の応援もあります。

また平成27年から力を入れてい



移動式簡易竹釜で竹炭を焼く

るものに、藪化した竹林の整備と竹材の利用があります。

「群馬県の竹林面積は統計上1200haあまりで25年間変わっていませんが、実際には増えていて藪化しているんです。

フォレストぐんま21ではこの竹林の整備を頼まれるようになり、取り組み始めたのですが、竹林の整備を進めるためにも伐った竹材の活用が重要です。ただ大量に使

える用途がそうない。考えられるのは竹炭で、これを土壌改良材として利用してゆけば竹林の整備にもなるということで、最近はこの取り組みに力を入れています」と菊川理事長。

株式会社かんぽ生命保険の支援により一昨年、昨年と続いて10月に、竹炭の活用・普及を目指して「ポークラス竹炭シンポジウム」を、フォレストぐんま21が拠点として

いる群馬県憩の森・森林学習センター（渋川市）で開きました。

「森林整備は天候に大きく左右されます。安全が第一なので無理はしないようにしますが、毎週のように行事を組んでいると、なかなか予定通りに進まないこともあります。それでも最終的に作業を終えることができるのは、メンバー全員が理



竹林整備を終えたフォレストぐんま 21 のメンバー

想の森づくりを目指して、技量を研鑽し、全員が一丸となって取り組んできた成果だと自負しています」（菊川理事長）。

フォレストぐんま21のバックボーンには「礼は之和を以て貴しと為す」があるのです。

*まとめ 編集部

レーザーコンパスで樹高計測、 チェーンソーで丸太輪切り体験



生徒たちはアタッチメントに興味津々
(富山県立南砺福野高等学校)

砺波地区林業研究グループ協議会「富山県」

さんきょそん
散居村や合掌造りの地で
インターン者、女性も
活躍する林研

砺波地区林業研究グループ協議
会(森田峰生会長、以下、当会)
は、富山県南西部に位置する砺波
市と南砺市で主に活動しています。

砺波市は、球根生産量日本一を誇るチューリップや、広大な耕地の中に民家が散らばって点在する散居村の美しい景観で知られています。また、南砺市には、世界遺産に登録された五箇山合掌造り集落があり、毎年、国内外から多くの観光客が訪れています。砺波平野を取り囲む平野部から白山山系など標高1000～1500mの低山・丘陵山地が森林地帯となっており、砺波地区の民有林面積は4万6000ha、そのうち人工林面積は1万4000haで人工林率は28%と全国平均より低くなっています。

当会は、昭和41年に「林業関係者の連絡調整を図ること」「自主的なグループ活動を促進し、林業の振興によって、林家経済の向上に寄与すること」を目的として、森林所有者、民間林業事業体、森林組合職員等が集まり、結成され

ました。現在のメンバー数は40名(うち女性10名)で、インターンにより就業された方や女性が多く在籍していることが特徴です。

林業のプロフェッショナルと連携した実習

砺波地区の林業には、「担い手不足」という問題があります。この問題は富山県全体の問題でもあります。私たちが活動する砺波地区で、率先して担い手対策の問題解決に向けた活動に取り組むことにしました。

砺波地区の林業は、主に富山県西部森林組合(以下、西部森林組合)が担います。富山県西部に位置し、氷見市、高岡市、射水市、小矢部市、砺波市、南砺市の6市を管轄し、組合員さんの森林整備に力を注いでいます。組合員数は約1万3000人、管内民有林面積は約7万3000haと、県内は

もちろん、全国的にも大規模な森林組合です。

今回、このような林業のプロフェッショナルが集まる森林組合と連携して、高校生に林業体験をしてもらうことにより、林業への興味や関心が高まり、林業への就職の道を考えてもらえる場になるのではないかと思います。「高校生の林業体験実習」を企画しました。

しかし、富山県には林業に関する学科、コースを有する高校、大学等はありません。そこで、今回の林業体験実習を行うにあたり、地元の富山県立南砺福野高等学校（以下、南砺福野高校）に出向き、機械化が進む林業の現状や担い手不足の問題等を説明したところ、快く林業体験実習への取り組みに協力していただき、農業環境科1年生の皆さんを対象に実習を行うことになりました。

実習内容については様々な意見が出ましたが、やはり座学よりは実際にチェーンソーを触って、使ってみて、体験するほうがいいだろうということ、体験型の内容を多く盛り込むよう心がけました。

デジタルレーザーコンパスで樹高計測

平成30年8月31日（金）、1年生30名（男子17名、女子13名）を対象に林業体験実習を開催。班別行動をとり、各班に講師として、県職員の方と当会メンバーが付きましました。午前中は晴天で、良い林業体験日和。当日の実習内容、高校生の反応等は次のとおりです。

まず目視で樹高予測し、次にデジタルレーザーコンパスを使い樹高を計測、その後、実際に樹木を伐倒し、木の長さを巻き尺で測

り、答え合わせをしました。樹高を予測する面白さ、測量機器を使用する楽しさや精度の良し悪し、樹木の伐倒技術の素晴らしさなどを感じてほしいという企図です。

また、樹木を伐倒する前には、間伐することの意味や、伐倒した木は商品（丸太）として出荷することを伝えることで、ただ木を伐るのではなく、なぜ木を伐る必要があるのか、伐った木はその後

どうなるのかまで意識して体験してもらえようになりました。



林研メンバーのあいさつからスタート

目視での樹高予測では、ヒントとして、講師が身長2mになるような被り物を被り、対象木の横に立ちました。各自思い思いに、楽しそうに、樹高を予測していました。また、生徒たちに、採材寸法で



まずは樹高予測。身長2mになる被り物を着けた講師（写真中央）を目安に

ある4mの丸太が1本の木から何本採れるかを考えて予測するのも面白味の1つであることを伝えると、関心を持った様子でした。

レーザーコンパスでの樹高計測では、初めて機械を操作する喜びや難しさを感じていました。

次に行ったプロによる伐倒では、伐倒に入る前の退避場所や周りの

状況確認、伐倒での華麗なチェーンソーさばきや伐倒方向の正確性など、生徒たちはすべてに感動していました。木が倒れた時の音を聞いて木の重さを感じた、との声もあり、林業の素晴らしさと危険性を同時に味わってもらえました。

ハーベスタ・プロセッサによる伐倒・造材作業の見学

現在、林業は機械の力なしではできません。山に作業道が開設され、高性能林業機械が入り、効率的に大面積の森林を整備しています。

その代表であるハーベスタとプロセッサの機能を

高校生に見てもらうことにより、関心を高めてもらうことが目的です。

実際に機械が動

き始めると、全員が興味津々で注目。人力によるチェーンソー伐倒との作業スピードの違いや、スムーズな造材、丸太が生産されていく過程に驚いていました。特に男子生徒からは、「もう1本伐って見せてほしい」「トランスフォーマーみたいでカッコいい」という声がありました。

女子生徒ももう少し関心を持ってもらえたらと思いました。機械化が進む林業で、あまり体力や力の差に関係なく、

ハーベスタなどを乗りこなす女性林業者も活躍してほしいと思うからです。

チェーンソーによる丸太の輪切り体験

最初にお手本として、プロが行う輪切りを見てもらい、その

後、実際に全員がチェーンソーを使って体験。木を伐ることへの楽しさや難しさを感じてほしいと思ったからです。

先に作業の手順を説明し、絶対に危険な作業はしないことを強く伝えました。生徒は、初めて身に着けるチェーンソーズボンやイヤーマフ付きヘルメット、初めて使うチェーンソーに関心を持っていました。エンジンがかかるだけで怖がる女子生徒もいましたが、皆手順どおりに安全に輪切りをしました。女子生徒たちは、自分で輪切りにした薄い丸太を嬉しそうに持ち帰ると言っていました。また、輪切り体験が楽しかったのか、1



次にレーザーコンパスを使った樹高計測



チェーンソー伐倒の見学。伐倒の感動と危険を同時に体感



ハーベスタ見学。「トランスフォーマーみたいでカッコいい」という声も

西部森林組合では、森林を育てる林業とは別に、世界遺産でもある五箇山合掌造り集落の茅葺き屋根の葺替作業も行っています。林

合掌屋根の葺替作業 守り継ぐ仕事

人でたくさんの方数を輪切りにしている生徒がいました。その子は「将来、森林組合に入りたいです」と言ってくれました。私たちは、大変嬉しい気持ちになりました。



ヘルメット、チェーンソーボン着用で丸太輪切り体験

業にはこのような作業もあるということや、合掌屋根の素晴らしさを知り、興味・関心がより高まってほしいとの企画でした。

午後からは、あいにくの雨となったため、葺替作業の体験は中止し、座学での説明となりました。

日頃、合掌屋根の葺替作業に従事している職人から、屋根に使う茅やアサガラ、マンサクなどの材料

の説明や、昔ながらの道具の説明をしてもらいました。また、茅はすべて五箇山で採れた茅を使用しており、それも林業のサイクルの1つであり、15〜20年サイクルで葺替えをし、世界遺産を守っている素晴らしいさを伝えました。

体験実習後の高校生 「林業という職に就きたい」

体験実習後に高校生にアンケートをとりました。実習をする前は、

林業という職業がどんなものか知らない生徒が大半を占めていましたが、実習後は林業に関して理解が深まったという意見が多くありました。

また、生徒30名のうち半数が、この研修を終え、将来、林業という職に就きたいとの回答がありました。今後の高校生の要望としては、高性能林業機械の運転をしたい、自分でチェーンソーで輪切りにした木を使って何か作りたい、などがありました。大変有意義な実習となり、担い手確保、育成につながる機会となりました。

実習への手ごたえと 今後の抱負

今回の実習を通して、木の伐倒で高校生がとても興味を持ち、歓声が沸いたことに喜びを感じました。伐倒という1つの作業だけをとっても、林業について何も知らない人から見ると素晴らしい技術だと感じてもらえることがわかり、私たちが日々従事している林業が、富山県や日本の森林を守るための



合掌屋根の葺替作業をする職人から茅葺き屋根の材料を説明してもらう

素晴らしい仕事だということを、実習から改めて感じさせてもらいました。

今後も引き続きこのような林業体験などの機会を設けていくとともに、積極的に企業説明会等に参加して林業の素晴らしさをPRし、担い手の確保、育成に努めていきたいと考えています。

*まとめ 得能将平

事

インターンシップ

例

林研・高校・森林組合が連携 高校生の林業職場体験



フォワーダの指導を受ける生徒。
真剣に話を聞きながら、実際に操作

三重県林業研究グループ連絡協議会

〔三重県〕

地域ごとに特徴を持つ
活動を展開

三重県林業研究グループ連絡協

議会（以下、当協議会）は、県内
11の林業研究グループ（北は亀山
市から南は紀宝町までに存在し、

合計206名のメンバーが在籍）
から構成される団体です。三重県
は南北に長いいため、地域ごとに気
候条件や自然条件も大きく異なっ
ており、地域によつてそれぞれ特
徴のあるグループ活動が展開され
ています。

今回、当協議会が高校と森林組
合との間で日程や作業内容の調整
を図り、林業職場体験を実施しま
したので紹介します。

生徒たちに 伐出現場体験を

当協議会では、平成28年度から
「多様な担い手育成事業」を活用
し、三重県立久居農林高等学校（津
市）の環境情報科環境保全コース
の2年生を対象に、林業職場体験
を実施しています。「林業職場の
体験」ということもあり、単なる
伐倒技術だけでなく、より実際に
近い体験をしてもらおうと、津市

内にある中勢森林組合と連携しな
がら実施しているところです。

普段は授業の都合もあってまと
まった時間が取れないことから、
夏休みに合わせてスケジューリン
グし、連続した2日間で林業職場
体験を行っています。実は本年度
は三重県内で高校総体（インター
ハイ）が開催されるということも
あり、高校の先生方の都合を考慮
するとともに、インターハイの日
程も踏まえた実施計画を立てなけ
ればなりませんでした。そのため
調整が難航し、実施日程を決める
のが非常に遅くなつてしまいまし
た。

いざ、実施！ 間伐作業体験 1日目

なかなか日程を決められないと
いう状況を経て、やっと実施にこ
ぎつめた1日目は、高校が所有し
ている実習林でチェーンソーによ
る間伐体験です。先生方にお伺い
したところ、手鋸を使った間伐自
体は経験したことはあるものの、
チェーンソーを使うのは初めての
経験だとのこと。生徒たちもチェ

インソーの存在自体は知っていると思いますが、実際に手に取った時の重さや、エンジンをかけた時の振動や排気ガスのおいなどにはやはり現場で体験してみないとわかりません。初めて使うチェーンソーで、なかなかエンジンがかからずに苦勞する生徒や、いざ立木を伐ろうとすると腰が引けてしまう生徒も多く見られました。



初めて持つチェーンソーに、腰が引け、伐るときもつい手鋸のようにチェーンソーを前後に動かしてしまいがち



いざ実際に伐倒。チェーンソーの排気ガスのおいや振動を実際に体験する初めての機会だ



森林組合の指導員より、基本的な伐倒方法の説明を聞く生徒たち。これからチェーンソーを使うので、少し緊張した面持ち

の汗が暑さのためなのか、チェーンソーを使う事への緊張なのかはさておき、一生懸命にチェーンソーを操っていました。

実際の体験の流れとしては、まず、お手本となる森林組合の指導員さんが立木の伐倒を行うデモンストレーションの見学です。その後で班別に分かれ、班

ごとに森林組合の指導員さんが1人ずつ張り付き、安全確認と技術指導をしながら間伐作業に取り組みました。

ただ、元々が過密気味のヒノキ林での間伐作業であったことから、かかり木になりやすい条件が揃っていたことに加え、生徒たちがチェーンソーの扱いにも間伐作業にも不慣れなこともあって、倒す方向を見定めながら間伐をする

ものの、思ったような方向に倒れず、倒すたびにかかり木になってしまいうような状況でした。「間伐作業の体験」と言いながらも実際には間伐そのものよりもかかり木処理のほうに時間をとられてしまい、我々としても内心「かかり木処理体験だなあ」という思いにかられたことも事実です。それでも実際の林業の現場では起こりう

る話なので、現場を知るという意味では貴重な体験だったのではないでしょうか。

皆が協力して掛け声をかけ合いながら、チームワーク良くなり木処理を行っている姿が、いかにも元氣いっぱいの高校生という感じで非常に頼もしく思えました。

いざ、実施！ 2日目 グラップル・フォワーダ 操作体験

2日目は場所を移し、実際に森林組合が高性能林業機械を使って作業をしている現場での体験です。今回はグラップルとフォワーダ（グラップル付き）の操作体験を行いました。

森林組合の実際の現場での作業となるわけですから、前日よりもう少し緊張感があるのが、生徒たちの様子からも見て取れました。しかし、そこはやはり元氣な生徒が多いこともあって、機械に乗るのが楽しみという期待も大いにあったように思います。

前日に初めてチェーンソーを操作したばかりの生徒たちですから、今回の高性能林業機械も実際に見

るのも触るのも初めてです。現場に広い土場があったことから、その土場でフォワーダに材を載せて運搬する作業や、グラップルで材を掴んで別の箇所へ積みなおす作業などを体験しました。

手で持てるチェーンソーとは異なり、木材を掴むための大きな機械を使つての操作体験は、生徒たちにとつては大きなUFOキャッチャーをしているように思えたようです。初めて乗る機械ということもあって、思ったように動かすことができず、どうしてもガクガクとした動作になりがちな生徒が多かったです。ただ、クラスの中

にも数人は必ずいると思われる、この手の機械ものが好きな生徒たちは自主的に手を挙げて何度も搭乗し、慣れてくるとかなりスムーズに操作できるようになっていました。

この操作体験も、最初は漫然と木を掴んで載せる、載せたものを降ろす、というものでした。しかし指導員さんからの提案で、どれ

だけきれいに並べることが出来るか・どれだけきれいに積めるかの競争を始めると、少しずつ生徒たちの目の色が変わってきました。

「俺のほうが上手い」「いや俺のほうがきれいに並べた」などといった競争意識があつて、皆神経を集中させて操作を行うようになりました。誰が一番上手だったということも決めることもありませんでした、機械の操作体験



フォワーダの操作体験。掴む作業や載せる作業以外にも、フォワーダを前後に動かして、乗り心地も経験した

では、このようなちよつとしたゲーム的な要素があつたほうが、より一層やる気を引き出せるように思いました。

また、今回の作業現場のすぐ隣には小さな溪流と木陰があり、操作体験の待ち時間には水をかけあつたりしている生徒の姿も見られました。例年にない猛暑の中、熱中症を防止するという意味でも溪流と木陰が近くにあつたのは助かりました。このような自然に囲まれた環境で仕事をするこの言葉にできない良さや魅力も、十分に感じることはできたのではないか



ハーベスタ作業の様子を見学。掴んでから一瞬で伐倒し、玉切りをしていく様子に驚きの声があがった

ハーベスタ乗りはカッコいい！

と思っています。

最後に、森林組合の指導員さんが操作するハーベスタの動作を見学しました。前日にはチェーンソーでの間伐やかかり木処理に苦勞し、身をもって間伐作業の大変さを経験したばかりの生徒たちには、ハーベスタの動作は非常に驚きだったようです。立木を掴み、一瞬で伐採して枝を払い、玉切りまで

を済ませてしまう機械に驚きの声が多数上がっていました。

動作見学の後は、実際にハーベスタのコックピットの見学もしました。動作が複雑な分、グラップルなどに比べて操作が難しいことは容易に想像できますが、



ハーベスタの運転席などを見学。動かすことまではしなかったが、運転席に座って、どんな作業をしているのかを知ることができた

その分ハーベスタを自由自在に扱う姿に対して憧れにも似たカッコ良さを感じた生徒たちもいたようです。

体験後に生徒たちにアンケートをお願いしましたが、やはり高性能林業機械（特にハーベスタ）に乗ることが、乗れることがカッコいいという印象を持った生徒が多くいました。県内で唯一の農林高校に在籍しているものの、これまで林業に強い関

心がなかった生徒の中にも、今回の林業職場体験を通して、こういう現場で働きたい・働いてみたいという気持ちが生まれたようです。

次世代の担い手を育てるために

就業前に実際の林業現場を体験してもらおうということは、生徒たちが思い描く現場の姿と実際の現場の差をなくすという意味で、林業関係の職場で働きたい生徒と現場とのマッチングを図るために有効な手段だと考えます。

また、言葉では伝えることが難しい、現場に行かないとわからない

「林業の魅力を伝えるチャンス」であるという意味でも大切なことではないでしょうか。

昔に比べてあまり外で遊ばなくなったと言われる今時の学生たちには、机上で学べる知識ではなく、現場で体験する経験の重みが増しているように思います。今回の林業体験の実施により、これまで現場経験をする機会がなかっただけで、そのような機会さえあれば伸び伸びと活躍する生徒も多くいることがわかりました。

経験するチャンスをしっかりと作っていけば、林業に興味を持つ生徒も増えるのではないかと思います。

林業だけでなく第1次産業全体に共通する課題として、後継者不足・担い手不足があげられますが、少しでも多くの林業の担い手を確保していくため、当協議会としても、林業の楽しさや魅力を体験できる機会を提供していきたいと思っています。

*まとめ

三重県林業研究グループ
連絡協議会

事

インターンシップ

例

森林・林業の担い手育成につなぐ 高校生のチェーンソー・林業機械体験



指導を受けながらチェーンソーの
スターターロープを引く生徒

かみやま林業振興会「徳島県」

林業とすだち生産量
日本一

神山町は徳島県の中央部に位置

し、東西に流れる鮎喰川^{あぐいがわ}を中心に町が拓け、1000m級の山々に囲まれ、町の森林率は86%、内人工林率は69%と山間の町です。主

要産業は農林業で「すだち」の生産量は日本一を誇りますが、過疎と高齢化が進んでいます。

かみやま林業振興会（岡本悦男会長。以下、振興会）は平成5年に町内の4つの林研グループが合併し誕生しました。メンバーは85名、主に町内外の山林所有者がメンバーで現役の林業従事者は少数となりましたが、最近は森林ボランティアに取り組み男性や森林教育に取り組み女性もメンバーに加わっています。

過去にはチェーンソー講習の開催や、杉天然絞り丸太の振興に取り組みました。最近ではミツマタ栽培の振興や町が行う小中学生などの林業体験、森林ボランティア受け入れ時の指導者としてなど、町や林業関係者と協力しながら、さまざまなアイデアを取り入れた活動をしています。

林業後継者育成に向けて

神山町には搬出までを行う林業事業体は徳島中央森林組合本所（以下、森林組合）だけとなり、林業に取り組み後継者の育成が急務となっていました。そこで振興会では将来の林業従事者の育成に向けた取り組みとして地元の徳島県立城西高等学校神山分校（以下、神山分校）の生徒を対象とした間伐体験学習・高性能林業機械現地研修を、森林組合、町役場の協力のもと、毎年開催しています。

◆女子生徒はレーザーカッターで木工品づくり

神山分校は県内唯一の造園土木科を有し、小規模校ではありますが過去に農林科であったことから現在も実習林を有してチェーンソー講習などを行っている県内では



「森林女子部」たちの活動（徳島県立城西高等学校神山分校ホームページより）
<http://joseikamiyama-hs.tokushima-ec.ed.jp/>



かみやま林業振興会・岡本悦男会長より研修実施前の話を聞く生徒たち



徳島中央森林組合の原木市（競り市）を見学。仕事の厳しさが伝わってくる

数少ない高校です。

また、女子生徒は4年前に「私たちが学ぶ神山町のこともっと知りたい。神山町は見渡せば山ばかり。山（林業）のことについてもっと知りたい」と行動を起こし、「かつて主力産業だった林業を盛り上げよう!」と「森林女子」を結成。現在は部活として林業体験やレーザーカッターなどデジタル工作機械を活用し木工品の商品開

発に取り組むなど、女子ならではの明るさと発想で特色ある学校教育が行われています。

◆原木の競り市を見学

研修は10月17日、今年度は3年生18名を対象に行いました。

当日、生徒は森林組合に集合し会長からの挨拶、研修の趣旨、取り組み内容の説明を受けました。まず初めにちょうど月一度の原木

市が開催されていたことから町内外の製材業者が実際に競る現場の見学を行いました。

来春には就職し社会に出る生徒もいます。買い手の真剣なまなざしや競りの状況に社会の厳しさを見たのか、生徒たちは少しビクビクした表情を見せていました。

◆チェーンソー、プロセッサ、フォワーダ体験

その後、搬出間伐を行っている現場に移動し3班に分かれて体験活動を開始。チェーンソーは振興会メンバーが指導し、プロセッサ、フォワーダは森林組合機械科班員が指導し、振興会メンバーが補助



実際に輪切りを体験。学校でも習っているので運びもスムーズだ



チェーンソー操作の説明を受ける生徒たち



プロセッサ操作体験。
1つ1つ指導を受けながら動かしていく

を務めました。

チェーンソーは学校で扱い方などを習っていることもあり、振興会メンバーの説明を受け、落ち着いて手際良く扱える生徒も多かったです。

高性能林業機械のプロセッサ、フォワーダは、機械科班員から1つ1つの操作指導を受けながら行いました。「大きな機械を操作するのは楽しい。興味が湧いた」と、終了後のアンケートで述べていた生徒も多く、手応えを感じたメンバーでした。

バーでした。

とくしま林業アカデミー とも連携

徳島県では林業後継者不足の解消と、即戦力となる人材の育成を目的に「とくしま林業アカデミー」を開校しており、今回参加した生徒のなかに来春の入校予定者が1名いたこともあり、指導側も熱心な指導を心掛けました。

林業体験終了後、実際に機械科班による伐採、集材作業を見学し、その後、機械科班員から「生業としての林業。なぜ林業に従事したか」について話をしてもらいました。

班員の1人は「とくしま林業アカデミー」の卒業生です。学校で学んだこと、実際の現場で感じたこと、先輩方の教えの重要性など、これから社会に出る生徒たちにとって、先輩の生の声を聴くことができた貴重な体験だったと思います。以上で体験研修は終了しました。

体験した生徒の思い

研修終了後、生徒にアンケートを行いました。「林業に係わる仕



フォワーダのグラブ操作体験。初めてながら、興味を覚えた生徒が多かった

事をしたいか？」の問いに、今回の研修前は①思っていた4名、②ある程度思っていた5名のところ、研修終了後では①思った4名、②ある程度思った4名と若干少ない結果となりました。しかし、近年

の離職、転職率を考えると実際の現場を肌で感じ、大変な仕事であることも聞いた上での回答でしたので明るい希望もあると前向きに捉えています。

また「今回の研修は将来のため



就業して2年目の機械科班員から林業の魅力、楽しさを聴く

か、新たな木製品等の商品開発に取り組む女性や木工職人のもとで修業しながら、「いつかは神山で木工を行いたい」と話す若者など、林業や木工に携わる者が少しずつですが増えてきています。

また町産材認証制度を設け、町営住宅、町営集合住宅などに町産材を使うなど、木を使った町ぐるみの新たな取り組みも行われています。

に役に立ちましたか」との問いに、「大変役に立った」という答えが12名ありました。これから進学、就職に進む高校生に意義の有る研修が行えたと感じています。

神山町の山を、林業を、つなぐ

神山町では、ここ数年、林業の現場で6名の者が新規就業したほ

振興会はこれからも林業に貢献できるよう、また次の世代の若者の良き理解者として自分たちの経験や知識をつなげていけるよう頑張りたいと思います。

＊まとめ

かみやま林業振興会 事務局

事

インターンシップ

例

高校生の間伐体験。チェーンソー操作、伐倒、牽引ロープ。かかり木処理



栗山さんに手を添えてもらって玉切り。
「こわがらんでもいいばってん」と優しく声かけ

黒木町林業振興会「福岡県」

歴史ある
黒木町林業振興会

黒木町林業振興会（以下、当振

興会）は昭和33年に設立され60年に及ぶ地道な活動を続けてきました。当時は電柱の生産にかかわる事業を行う目的で発足しましたが、

電柱がコンクリートに置き換わると優良材生産に舵を切り、昭和49年に現在の名称に改め、間伐や枝打ちの技術向上と、磨き丸太生産のための研修会や情報交換に取り組んできました。

現在のメンバー数は40名でそのうち6名が女性、活動は20代から60代の若手や中堅が担っています。各地の林研グループがメンバーの高齢化や減少に悩むなか、当振興会は父と息子や母と息子というように2世代に渡るメンバーや、夫婦揃って参加しているケースもあり、世代交代がスムーズに進んでいます。八女市内6つの林研で開催する研修大会や親睦会では積極的に参加し、リーダー的役割を果たしています。

林業が盛んな地域性を背景に

福岡県の南部に位置する八女市

は「八女杉」の産地として知られ、県内一の林業地。黒木町はその中核を担う地域で、町の総面積1万3594haのうち森林面積は9394haで約69%あり、民有林は100%、人工林は78%を占めています。

建築不況のおおりで縁桁用の磨き丸太の需要は落ちましたが、その材を「のぼり竿」として神社やこいのぼり用にかえて生産し、高い技術と経験をもつ職人が活躍しています。当振興会の活動が長きに渡って活発なわけは、このように昔ながらの林業先進地であること、木材需要が低迷しても知恵を絞って切り抜けようとする姿勢があるからです。

10回目を迎えた
間伐実習体験

当振興会は「多様な担い手育成事業」に取り組み、福岡県立八女

農業高等学校（以下、八女農業）生徒40名へチェーンソーを使用した間伐実習体験を行い、今年で10回目を迎えました。八女農業には林業科がありましたが昭和48年に廃止され、森林で行う授業はなくなっていました。

11月22日午後1時、午前中まで残っていた雨が上がり、予定通り生徒たちは学校林に集合し、宮園福夫会長の開催の挨拶を緊張した面持ちで聞きました。



学校林に集合し、宮園会長の挨拶を聞く生徒たち。
表情は緊張気味だ

余念ない事前準備と 入念な段取り

それに先立つ午前10時、メンバー9名が集まり準備をしました。当振興会のメンバーはほぼ全員が山仕事に携わっていますが、今日の指導係は現役のベテランばかり。生徒が使用する備品をトラックで運び込み班ごとにセット。続いて林内で選木ですが、木の素情や配置のほか、生徒の作業空間や倒しやすさなども考慮に入れ、10本ほど選び目印テープを巻きました。



班ごとに配布する道具。左からチャブス、グローブ、笛、牽引用ロープとブーリー、クサビ

手際良く準備が整うと、次いで2人1組で担当を決め、実習の流れを確認するなど、直前まで打ち合わせが続きます。今日の活動の目的、意義など指導上の意思疎通が事前にできており、自然な連携でスムーズな運びでした。最後に生徒の服装や態度をチェックし「もし、指示に従わん生徒がおったら外れてもらていい」と、安全

のためには厳しい態度で臨むことを申し合わせました。

防護衣装着で 安全に作業を

整列する生徒たちからは未知の世界に踏み込んだ不安感が漂ってきます。現代っ子は刃物を持つことも、山道を歩くこともあまりないので仕方ありません。



生徒が集まってくる直前まで打ち合わせし、準備に余念がない

当振興会が作成した写真入りの作業説明書をもとに10分ほど説明を受けると、すぐに各現場に移動しました。8名ずつ5班に分かれ、各班に指導者が2名付き添います。チェーンソーを使う人は必ずチャブスを着けることになっており、みんなが協力して手早く装着。グローブをはめチェーンソ

ーを持ったとたん生徒の表情が引き締まりました。

伐倒の前に丸太の玉切りでチェーンソーの扱いを確かめます「なんかこわい」という生徒に、ベテランの栗山隆博さんが、キックバックなどの危険知識を教えながら指導していきます。生徒は手を添えてもらっているものの、緊張で腕に力が入り1回で筋肉痛。それでも輪切りを持って香りをかいだり手触りを確かめたり、緊張した表情が生き生きと変化するのが見て取れました。



時間短縮のため、チャプスの装着をみんなで手伝う

牽引ロープで安全な作業

50年生のヒノキ林、枝がかかることを前提に牽引ロープを張りま



輪切りを持ってポーズ。緊張がほぐれ自信に満ちた笑顔。生き生きとしていた



装備完了。スタイルが決まると俄然やる気が出る

す。思い通りの方向にラインを確保できるフローティングアンカーをセットし、3名の生徒が安全な立ち位置で引っ張ります。システムの準備が整うと、松延浩二さん

が受け口の入れ方を解説。八女森林組合で新人の教育係を務める松延さんは「教えるときは、解りやすさと勢いが大事」と専門用語は使わず、可能な限りやって見せることにしており、生徒を元気づける言葉かけも忘れません。生徒たちは引き込まれるように集中。しんと静まる生徒たちに「いますぐ理解できんでもいいので、自分で感じた通り、まずは伐ってみよう」と促します。

チェーンソーを水平に支えてもらいながら真剣な顔で受け口を入れる生徒。教えられた通り、立ち上がって「伐倒方向よし！」と大きな声で手を指し確認しましたが、松延さんに「そつじゃなか」と突っ込まれドツと笑いが起きました。

追いつくを入れるときも、ツルを切り離さぬよう手を添えてもらい、最後はクサビを打ち込みます。コーンコーンと音が響くなか、全員で木の動きを見上げ空気が張り詰めます。松延さんの「引っ張れ」という大声とともに牽引ロープが引かれましたが、枝がからまって3名では押し戻されてしまい、応



「伐倒方向よし！」。
しかし、受け口の方向をよく見ると「そっちじゃなか」



クサビが打ち込まれるタイミングを計って牽引ロープを引く。
フローティングアンカーを使い、生徒は安全な立ち位置で作業

＊まとめ 編集部

「今年は卒業生が1人
森林組合に就職しました。
タネが実を結んだという
ことです」。充実した気
持ちで来年につなげてゆ
きます。

当振興会ではほかに黒
木小学校5年生に枝打ち
体験授業を実施するなど、
林業への知識と関心を深
めてもらう活動を行って
います。



受け口の解説をする松延さん。
「教えるときは、解りやすさと勢いが大事やけん」

林業の入り口が 体験できた

わずか2時間の体験でしたが生
徒は、「緊張したけど、優しくサ
ポートしてもらえたので自分で玉
切りができました」「林業の入り

援の生徒と松延さんもかけつけ引
きます。「そーれっ」何度めかの
かけ声で木はゆっくりと倒れ、安
堵のため息のあと拍手が起こりま
した。

口を体験させてもらいました」「手
がパンパン」「山の空気が気持ち
良かった」と、来たときは別人
のような笑顔で感想を言い、礼儀
正しくお礼を述べていました。八
女農業の先生は「生徒にとって、
このような実践教育が生きた力に
なります」。

生徒らが帰ったあとに道具類を
片付けながら、宮園会長は「生徒
はみな良い子だった」と、当初の
心配が杞憂だったことを喜びまし
た。

事

インターンシップ

例

大学生の林業就業体験 クヌギ林整備からシイタケ生産まで



慣れない鎌でおそろおそろ下刈り作業をする学生
(日本文理大学)

大分県林研グループ連合会「大分県」

スギと乾シイタケの
生産量を誇る地域で

大分県の民有林面積は約40万ha

で、スギ・ヒノキを中心とした人工林がその半数余りを占めています。特に、スギの生産量は全国3位を誇っています。また、乾シイ

タケの生産量は全国の生産量の4割強を占め、全国乾椎茸品評会で20年連続の優勝を果たすなど、品質も拔きんでいます。そして、原木生産に用いる県内のクヌギ資源量も460万m³あり、全国の2割強を占めています。

大分県林研グループ連合会(大平忠利会長。以下、県林研)は、林業技術を研究し、林家の経営改善や地域林業の発展を図ることを目的に昭和37年に結成されました。56年目を迎えた現在、県内19の林業研究グループのメンバーたちが、和気あいあいと林業技術の研鑽や後継者の育成に取り組んでいます。

シイタケ生産地ならではの クヌギ林の下刈り体験

本県では林業の後継者・担い手の不足が叫ばれて久しく、県林研でも、この課題を解決する手助けとして、小学生を対象とした森

林教室やシイタケ駒打ち体験等に、県や国の補助事業を活用し取り組んできました。

本年度は国の事業の見直しもあり、新たな取り組みを実施しようと役員会で協議しました。そのようなか、大分市にある日本文理大学(以下、NBU)から学生のスキルアップと職業体験を兼ねた林業の仕事を教えて欲しいとの話があると、県の担当者から情報提供があつたので、打ち合わせのため大学に伺いました。

NBUでは、平成26年の県の森づくり大会跡地(大分県立香々地^{かかぢ}青少年の家<豊後高田市にある県の研修教育施設>以下、青少年の家)でクヌギ林の下刈り体験を毎年実施しており、ぜひとも県林研に現場の技術や下刈りによって成長したクヌギを活用したシイタケ栽培について教えて欲しい、との話をいただきました。この話を受

け、役員会で体験研修の内容や日程を協議し、NBUの先生とも調整を行い、内容を固めていきました。その結果、高性能林業機械操作・立木伐採体験と、クヌギ林の下刈り体験の2案が残り、NBUの希望によりクヌギ林の下刈り体験を平成30年12月1日に行うことに決定しました。

県の研修施設と林研が タッグを組んだ活動

現地はNBUが今まで下刈り体験を実施していた青少年の家のクヌギ林約0.5haとし、10月30日に青少年の家事業課長立ち会いの下、現地確認並びに打ち合わせを行いました。

現地を確認すると草が旺盛に生育する時期ではないものの、気候が温暖な九州の海岸地域では10月末でもかなりの草が繁茂していました。

また、青少年の家からは職員だけでは草刈り作業まで手が回らないので

現地を有効活用し、草刈りも完了でき助かる、将来は下刈り体験を実施するクヌギ林を伐採し、子供たち向けにシイタケ駒打ち体験を実施したいという話がありました。それに対して県林研からも、伏せ込み場所のアドバースや今後の助言が可能だという話もできました。さらに青少年の家では次年度から森林教室の実施も計画しており、県林研にも講師として協力して欲しいという話もあり、次年度以降



体験に参加する21名の学生たち

の新たな事業に繋がる話もできました。

造林鎌で 安全に下刈り

就業体験当日は、NBUから1・2年生の男性16名、女性5名と指導者1名の22名、県林研からは10名、県から1名と、総勢33名が体験研修に参加しました。

穏やかな小春日和の下、

研修が始まりました。まず、

県林研の大会会長があいさつし、引き続き、県内で著名なシイタケ生産者でもある大会会長から乾シイタケ生産の一連の流れや原木となるクヌギ林の整備について説明がありました。

学生たちは、これまで断片的に体験してきた下刈りや駒打ちなどの作業がシイタケ生産のどこに位置するかなどについて興味を持って真剣に聞き入っていた様子でした。

今回の研修では安全面に配慮して、学生は危険の少ない造林鎌を用いることにし、県林研のメンバーや県の担当者から、鎌は刃を滑



シイタケ生産のプロ・大会会長から、乾シイタケ生産の流れやクヌギ林整備の説明を聞く

らせるようにすると草が刈りやすいことや、隣の人の鎌が届く範囲には入らないことなど、鎌を使う上での基本的な説明を行ったあと、下刈り作業に入りました。

学生の多くは鎌に触るのが初めてで、始めはおそろおそろ草を刈っていました。徐々に鎌の使い方にも慣れ、クヌギを覆う草や絡みついた蔓を切っていました。

この間、県林研のメンバーは実際の下刈り現場のデモンストレーションとしてエンジン式の刈払い機を使って大きく成長したセイタカアワダチソウなどを刈っていました。

下刈り習得の早さに、 嬉しい誤算も

昼食をはさみ、13時から作業を再開しましたが、学生の頑張りにより、県林研メンバーによる手直しを含めても想定時間よりも早く終了してしまいました。

学生たちの技術習得の早さを見



初めて鎌を使う学生たちも、少しずつコツをつかんで刈っていく



メンバーはエンジン式の刈払い機を使いデモンストレーション

誤っていたのは喜ばしい誤算でしたが、次回実施するときは作業や説明を追加する等で時間を有意義に過ごしてもらえるように工夫が必要だと感じました。

学生と林研メンバーの 意見交換会

この後、青少年の家の研修室に

移動し、県林研の大会会長が座長になり、林業全般について県林研のメンバーとの意見交換会を行いました。研修内容がシイタケ生産に係るクヌギ林の整備だったため、学生の質問はシイタケ関係についてのものが多かったです。「シイタケ生産に携わった理由」や「森林で働くことの楽しさや苦しさ」

などの質問が出て積極的な意見交換ができました。

県林研メンバーたちも学生の質問に自分の経験を交えて受け答えし、今後の林研活動の参考になったようでした。

NBU学生の 主な感想

・今回の体験研修で、林業の大変さやきつさ、楽しさを実感できた。

・機会があれば、森林の生態や植物についての話も聞きたい。

・年間を通じてシイタケを育ててみたい。

・草刈りをしながら様々な知識が得られ、林業への興味がわいた。

・大分県の特産物ができるまでの工程を知りたいので、様々な産物についても教えて欲しい。

・林業の仕事について詳しい講義をしてほしい。そのあとに体験ができる研修があるとよい。

・シイタケほだ木の設置や収穫の体験がしたい。

などがありました。

このような感想や意見を受け、県林研としても、今後の研修や担



今回の就業体験活動で活躍したメンバーたち

い手の確保に向けた取り組みのあり方について、さらに検討していくことが必要だと思いました。

和気あいあいとした意見交換会でしたが、終了予定時刻が近づいたことから大平会長が最後のあいさつを行い、終了しました。最後は学校に戻る学生のバスを県林研メンバー全員で見送り、今回の研修を終了しました。

**生産、技術、森林の機能保全…
林業の様々な
魅力を伝えたい**

今回の研修では、シイタケ生産に関する作業が主な研修内容でしたが、NBUからは、これからも学生向けの研修を実施して欲しいと要望があったので、次年度も機会があれば今回のふりかえりを反



意見交換会の様子。学生たちからは、シイタケ生産だけでなく、林業という観点についても質問が寄せられた

作業についての体験研修を実施する意向もあることから、青少年の家に協力して、林業の魅力を子供たちに伝えたいと考えています。

さらに、スギ、ヒノキ林の現地が確保できれば、木材生産や森林の機能保全を目的とした森林の整備方法や伐木・造材など一般的な林業技術の体験研修にも取り組み、今後の林業の担い手の確保に繋がっていきたいと考えています。

映した研修を計画したいと考えています。

また、就業体験の現地とした青少年の家でも小中高の生徒、児童を対象にしたシイタケの駒打ち体験を不定期で行っており、今後は、今回下刈りを行ったクヌギ林に隣接する広葉樹林をシイタケのホダ場として整備し、クヌギ林の育成から伐採、駒打ちから伏せ込みまでのホダ木作り、ホダ場管理から収穫というシイタケ生産の一連の

＊まとめ
大分県林研グループ連合会事務局

事

女性林業者への安全研修会

例

体験学習運営に向け、安全・技術を向上 女性部の刈払機研修と安全衛生講習会



刈払い作業の実習。講師の阿久津さんの実演と話を聞く女性部のメンバーたち

たていわ 館岩地区林業振興協議会「福島県」

森林に恵まれた館岩地区の
林業振興のために

福島県の南西部に位置する南会

津町館岩地区は、美しい尾瀬国立公園の入り口にあり、昔から山の恵みを生かした暮らしが営まれてきました。林業では、林野率が95



美しい尾瀬国立公園の入り口にある館岩地区

%と豊かな森林に囲まれ、国有林が54%、民有林が46%で、全体の80%が広葉樹林です。民有林の人工林率21%のうち、カラマツの面積割合が50%を占めているのが特徴で、成熟期を迎えたカラマツと広葉樹資源の活用が課題です。

豊かな自然に恵まれた地域ながら人口減少に直面している館岩地区。地域活性化のためには林業振興が重要と考え、平成5年2月、12名の有志が集まって館岩地区林業振興協議会（以下、当協議会）を設立しました。森林資源の活用

による林業・木材産業の発展に寄与することを目的に、①カラマツ林分の間伐、②トチノキ、ホオノキ等広葉樹苗木の生産推進事業、③林業先進地視察、④地元小中学生との交流や環境教育旅行支援活動、これら4つの活動を精力的に行ってました。

青年部と女性部を設立し、活動分野を拡大

当協議会の活動の具体例をあげると、カラマツの人工乾燥を研究し、人工乾燥したカラマツで、地域の伝統工芸であるろくろ引きの花瓶を製作したところ評判が良く、売り上げを活動資金にすることができました（現在は木工職人が引退し、製作はしていません）。また、地元小中学校を通じて子ども森林環境教育学習を実施。平成16年からは会津高原たかつえ教育旅行誘致協議会に参画し、関東圏の小中学校の環境教育旅行を受け入れ、炭焼きやきのこ栽培など森林体験の支援を行い、地域経済に寄与しています。

しかし、当初のメンバーが高齢化したことと、活動内容が多様化し多忙になったことが理由で運営が厳しくなりました。そこで地元の若者に呼びかけたところ、メンバーが25名

に増え、平成25年に実働部隊として青年部設立の運びになりました。さらに、もっと幼い子どもたちにも森林文化を伝承しよう、そのためには「かあちゃん」や「ばあちゃん」に参加してもらおうと呼びかけると、30〜70代の8名の女性に応え、平成27年には女性部が設立されました。女性部は地元幼稚園児とその保護者を対象に、きのこ栽培、地域の緑化活動でサクラの植樹、園児による育苗などを年間行事として行っています。



幼稚園児と保護者が参加。粘土のように菌をこねて植菌体験



女性部のみなさん

女性たちの 技術向上研修と 安全衛生講習会

10月14日、女性部は刈払機の研修と安全衛生講習会を開催しました。

午前10時、秋晴れのもとメンバーの所有林に女性部メンバー7名が集まりました。講師は青年部メンバーの阿久津秀幸さんです。始めにエンジンのかけ方や燃料を充填するコツなど取り扱いの説明を受け、実際に阿久津さんの手順を見て、1人ずつ実技に入りました。チョークを戻しエンジンをかけ、10mほど刈ってみます。

「ブンブン振るんではなしに、右から左へ動かして、左にいったら右に戻してから刈りましょう」「腕で振るんでなしに、体ごと振るようにすると楽です」「刃の右側に当たったらキックバック起こすんで、気をつけて」など、1人ずつにアドバイス。阿久津さんの説明は簡潔で具体的。ハンドルの持ち方や刃の傾け方のほか、刃の種類や研ぎ方、替え方を習いました。

終了後は、メンバーたちから「ずっと自己流でやってきたけども、正しい扱い方を知ると安全だし体が楽だわ」「今までに比べ、効率良く刈れて怪我もしなくなった」「速く、たくさん刈れるようになった」などの感想がありました。

昼食を挟んで午後1時から林業普及指導員を講師に、座学で安全衛生講習会を受講しました。刈払機の構造と刃の回転の解説を受けるか、安全に扱うにはどうするかなどを学びました。講師のユーモアを交えた話に笑い声をあげつつ真剣に聞き入るメンバーたち。午前中に実技をやったから、理屈がストンと理解できたわ」と話していました。

研修では他にポイズンリムーバーを使ったハチ刺され対処法や、危険予知活動を学びました。

安全、技術を 知ること、 活動のレベルアップを

女性部会長の阿久津啓子さんは、「安全や技術を学ぶ、知することは、子どもたちと活動する上でも必要



座学で安全衛生講習会を受講している様子。
機械の仕組みや構造を知ることにも実践に生かされる

です。事前に下見する、備えをするという視点を持てて、とても役立ちました。今後の活動にも」と話していました。

設立間もない女性部は、林業の知識や技術が乏しく青年部の全面的な協力で活動してきましたが、今回の刈払機技術研修と安全衛生講習会を受け、少しずつでも自信と力がついていると実感しています。

子どもたちに 願いを託して

こんなに豊かな自然のなかで育っていても、うっかりすると見逃してしまふ。青年部では小中学生に森林体験学習を行っているけれど、もっと幼いうちに五感で感じとって欲しい。そんな願いから始まった女性部の活動。秋になると3〜6歳までの園児と一緒に森に



子どもたちには山で楽しい思いをさせたい



森でどんぐりを探す子どもたち

拾ったどんぐりをポットに埋めて、
「芽が出るかな」

行つてドングリを拾い、それをポットに蒔き、芽が出たものを幼稚園で育てています。数年後、その苗を町有林に植樹する予定で、保護者も森林への関心を寄せてくれるようになりました。

事務局を担当している鈴木秀明さんは「楽しい思いをした子はまた山に戻って来てくれると思います。それが館岩地区でなくても、林業や森林の仕事に携わってくれる子が1人でも増えてくれれば、私たちは嬉しいのです」。

当振興会は、子どもたちに願いを託し、地域ぐるみの活動を展開しています。

＊まとめ 編集部

第2部

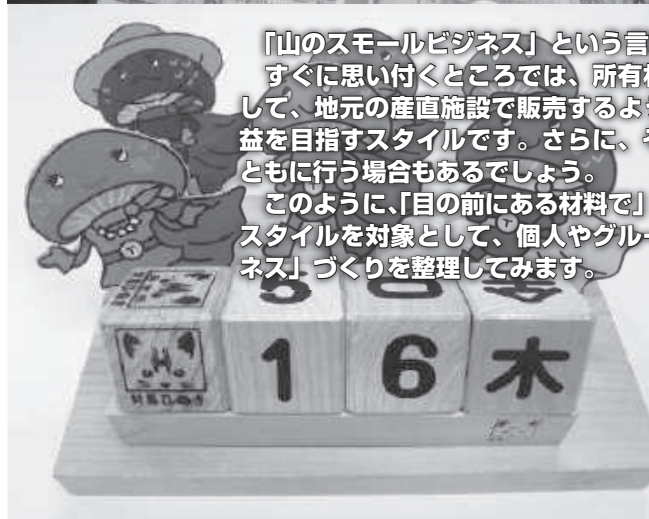
山のスモールビジネス

・女性グループの「食づくり」編
・グループ活動の「クラフト」編



山のスモールビジネス

編集部



「山のスモールビジネス」という言葉から、どんな営みを連想しますか？
すぐに思い付くところでは、所有林の材、特用林産物などを収穫・加工して、地元の産直施設で販売するような、自家（個人）でちょっとした収益を目指すスタイルです。さらに、それらを林家グループのような仲間とともにやる場合もあるでしょう。

このように、「目の前にある材料で」「大きな設備や資金がなくても可能な」スタイルを対象として、個人やグループで取り組める「山のスモールビジネス」づくりを整理してみます。



「山のスモールビジネス」と言えども、通常ビジネスから外れたやり方をしていては成功への可能性が低くなってしまう。製造・加工からマーケティング、販売までの手法は通常ビジネスのやり方を踏まえた上で、「山のスモール」ならではの良さを追究したいものです。

本テーマの「食づくり」であれば、山で栽培・採取した山菜やキノコ等を、そのまま商品として（整えて）出荷する、あるいは調理・加工して販売する、というスタイル

女性林研グループとして「食」をテーマに取り組む事例に注目してみましょう。そしてそれらの事例から、食づくりによる「山のスモールビジネス」の特徴、工夫やコツを見ていきます。

女性グループの「食づくり」編

まず、「山のスモールビジネス」を、次のように考えます。

- ▼ 身近な材料を活用／所有山林、自宅周辺など身近にある資源を活用
- ▼ 大きな設備、資本投資が不要
- ▼ わずかでも収入を得る／ビジネスの流儀に沿ったものづくり・販売で、わずかであっても収入に繋げるレベルを目指す（仲間で楽しむだけのものづくりとは一線を画す）

ルになります。このように書くことで、「なんだ、簡単にできるのでは」と思われるかもしれませんが、相手（購入者・出荷先）があることです。ので、買ってもらう・喜んでもらうための工夫や仕掛けも必要となるはず。では、どんなことが必要なのか。

全国の女性林研グループの中には、同じスタイルの活動事例がいくつも見られますので、それらの事例から考えてみましょう。

① 製造・加工

佐賀市婦人林業研究会（以下、佐賀市婦人林研）では、林縁等に自生するウバユリ（ユリの仲間）の根を採取し、そこからユリ粉（デンプン粉）を採る活動を行っています。この「ユリ粉」は、郷土菓子「ゆり菓子」（写真1）として

事前に保健所へ相談を

食づくり活動に関しては、事前に最寄りの保健所へご相談ください。地域や活動の内容によって異なりますが、食品営業許可を受ける、食品衛生責任者を置く、といった各種手続きが必要となるはずです。



写真1 郷土菓子「ゆり菓子」

親しまれてきたもので、お湯に溶き、葛湯のようにして食べるそうです。ところが、時代とともに、本来の原料であるユリ粉から馬鈴薯デンプン粉へと移り変わっていったため、ユリ粉の製法がよくわからず、手探りでスタートすることとなりました。

製造技術の研究

ウバユリの根からユリ粉を作るには、ユリ根を掘り採る、すりおろす、水にさらす、という工程となりますが、これがなかなか難しい作業だったようです。というの

秋だったので、ウバユリの地上部は枯れ、見分けが難しく探すのに一苦労。さらに、約5kgのユリ根から採れたユリ粉はわずか200gと、歩留まり4%という結果に、商品化を目指していた皆さんは、「これではとても…」と肩を落としたそうです。

しかし、佐賀市婦人林研の皆さんはそこで諦めませんでした。収量を上げるために、葛粉の老舗（県外）へ視察に行くなどしてさらに研究を重ね、初夏に再度、ユリ粉採りにチャレンジしました。

その結果、約5kgのユリ根から採れたユリ粉は約1.3kgと、歩留まりが25%までに大幅に向上したのです。その後も何度か採取を繰り返し、採取時期は春の方が適していることも確かめました。

東京での試験販売も行って手応えを掴んだ皆さんは、ユリ粉100%の「ゆり菓子」を年1回限定販売していきたいと意欲を燃やしています。また、ウバユリ栽培方法の確立を目指すなど、さらなる研究にも余念がありません。

「食」の活動は製造・加工からスタートしますが、その際に「さらに美味しいものを」「質の良いものを」「もつと効率良く」といろいろな課題が出てきます。失敗や頭の痛い課題があっても、グループみんなで知恵を絞る。視察に赴いたり試行錯誤を重ねて研究を続け、道を拓く。佐賀市婦人林研の皆さんの活動は、そんな好事例です（本情報集第3部の66頁でもご紹介しています）。

②商品開発・マーケティング

富原婦人林業研究クラブ（岡山県、以下、富原婦人林研）の活動は、林業にとって厄介者であるつる植物「クズ」を使って、「食」の商品化に取り組んでいるグループです。

“厄介者”商品に

クズというと、根から葛粉を採ることが広く知られていますが、富原婦人林研の皆さんは、その新芽をお茶として商品化しました。皆さんは、真庭市が開催した里山宝探しゼミナールで、薬学の先生から野草の薬効や調理方法を

学んだことをきっかけに、野草料理の研究や野草を使った商品開発に取り組んできました。グループで野草勉強会を重ね、野草を使った新たなレシピを次々と考案していったのです。

富原地区は昔から茶所として有名なため、その名産の新たな一品として生み出したのが、クズの新芽を使った「くず新芽茶」です。このお茶には、クズの新芽に加え、ヒノキ、アスナロ、クワ、クマザサの葉が入っていて、5つの山の幸をブレンドしたものです。生産は平成24年から始まり、お客さんから支持を得ながら継続して販売しています。

オリジナルのパッケージと親しみやすいキャラクター

その商品が写真2です。オリジナルデザインのパッケージが目立ちますね。特に注目したいのは商品キャラクター。メンバーの愛称である「富原やまんばあば」を図案化したキャラクターです。

このように、グループのトレードマークとともに洒落なパッケージとなると、他の商品との差別化が図れますし、商品としての魅

力がぐつと高まりますね。店頭に並んでいたら、思わず手に取ってみたくなるような親しみやすさがあります。

現在、真庭市内の商店や農産物直売所で販売しながら、イベント等で出店販売を行っているのと。また、「くず新芽茶」でイン



写真2 「くず新芽茶」のオリジナルパッケージと商品キャラクターの「やまんばあば」

ターネット検索すると、商店の通販ページがヒット。つまり全国誰でも購入できる商品で、「くず新芽茶」＝富原婦人林業研究クラブというPRにもなっています。

「くず新芽茶」の事例から読み取れることは、商品開発とは商品そのものを作り出すことに加えて、作り手の「顔」としてその価値をいかに高めるかに工夫のしがい、やり甲斐がある、ということではないでしょうか（本情報集第3部の70頁でもご紹介しています）。

顧客の声を反映した商品作りへ

せっかく商品開発を行うなら、知恵を絞りたいのがマーケティングです。マーケティングと言うと敷居が高く感じられますが、大まかに言えば、お客さんの声を聞き、その結果を取り込んで商品開発や販売戦略に反映させていくことと言えます。

林研グループで行うことの多いイベントへの出展は、マーケティングの絶好の機会です。訪れたお客さんから生の

声を聞けますし、それが肯定的なものなら確かな手応えとなり、否

定的なものであれば（シヨック

ではありますが）まだ改良の余地があるという

ことですね。「食づくり」活動

に取り組み

れている皆さんは、こうしたイベント出展の機会も多いと思いますが、定期的に出展できる催しの1つに「朝市」があります。

岩国地区林業研究グループ連絡協議会女性部会（山口県）の皆さんは、本格的な山菜出荷に向けて取り組んでいます。その中に、岩国市中心部の商店街で毎月開催される朝市に出店して、山菜などを試験販売する皆さんの姿がありま



【マーケティング】朝市に出店 お客さんの声を聞く

写真3 商店街の朝市「軽トラ新鮮組！」での山菜・枝物類の試験販売（岩国地区林業研究グループ連絡協議会女性部会）

した（写真3）。「4月の山菜、12月のクリスマスリースや正月用の枝物等の時期に絞って継続して出店しています。消費者ニーズに応える商品の検討を重ね、会員が作った正月飾りや野菜の提供も始めるなど…」とのことで、まさにマーケティング活動そのものを朝市での販売を通して行っています。朝市のほか、生産者が農産物を持ち寄り、市場形式で直売するマ

ルシェ」と呼ばれる催事も近年人気を集めています。お客さんとの対話を通して反応を確かめ、それを商品作りや販売に活かしてみませんか。

③流通・販売

大きな都市から離れた山間地である場合、作った商品をお客さんに届けるには、①大きな流通に乗せる（JA等の共同出荷やスーパーへの直販など）、②マンツーマンで直接届ける（個別注文対応）、③お客さん側に来てもらう（産直施設への出荷・販売）が代表例です。そのうち、①は本格的な経営となりますので、ここでは②と③について見ていきます。

離島からインターネット販売

まず、種子島姫竹古田生産組合（鹿児島県）の事例です。女性だけのグループではありませんが、その名の通り、種子島の林研グループです。離島ということで、流通面では非常に厳しい条件ですが、特産のタケノコ「ニガタケ」のインターネット販売を行っています（写真4）。

ニガタケは和名・リュウキユウチクで、指くらの太さのタケノコを食用とします。アク抜き不要でほのかに甘味のある「美味」なのとか。

さて、この「ニガタケ」は、新鮮なほど美味しいのですが、皮を剥いてしまうと鮮度が落ちてしまい、大量出荷が難しく、島内での自家消費が主体だったそうです。

そこで、平成24年に冷蔵施設を導入して、冷蔵の宅配便で利用するなど鮮度の維持に努め、主に個人への販売・発送を始めたそうです。作業の流れとしては、組合の皆さん共同で収穫・皮むき作業を行い、袋詰めにして冷蔵庫で保存。注文があれば冷蔵の宅配便で発

【インターネット販売】冷蔵宅配便で島外へ！



送します。ちなみに、平成28年度の島外出荷量は458kgでした。島外のお客さんへの販売にはインターネットを活用し、地元

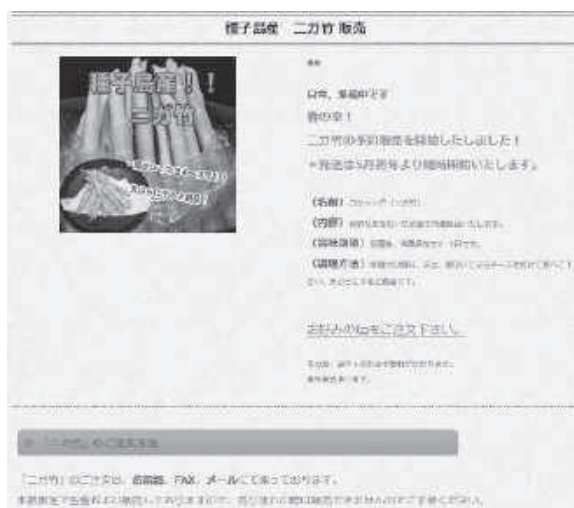


写真5 ニガタケのインターネット通販ページ
（浜島商店WEBサイト／www.hamashimashouten.comより）

写真4 ニガタケ（種子島姫竹古田生産組合）

の「浜島商店」のWEBサイトを通じて購入可能となっています。この浜島商店のWEBサイトは、商店名でインターネット検索するとすぐにヒットします（www.hamashimashouten.com）。お客さんが注文する際は、WEBサイト上の注文画面に住所などを入力して注文すると、送料を含めた総額の連絡があり、宅配便の代引き（代金引換／配達時に商品と引替えに配達員へ代金を支払う）で決済となる仕組みです。また、同様に電話やFaxでも注文可能となっています（写真5）。

インターネット販売での決済方法は、クレジットカードや振込みの先払い等、いくつかありますが、運送会社に代金受け取りを委託する代引きは、代金の回収が容易で注文ごとの入金確認が不要、クレジットカードを所有していない・使用に抵抗のあるお客さんにも喜ばれるなど、便利な決済方法の一つです。その反面、手数料がかかる点がネックとなりますが、主要な運送会社（宅配業者）の代引き手数料は、商品代金1万円までは300円程度となっています（編

集部調べ)。なお一般的には、この手数料は注文者負担とする販売者が多いようです。これから「スモールビジネス」でインターネット通販にチャレンジしてみたい方には有力な決済方法の選択肢となるでしょう(※利用には決済を代行してくれる運送会社へ事前に申込み・契約が必要となります)。

産直施設での販売・運営 マネジメント

続いては、産直施設での販売事例を見てみましょう。道の駅などで、生産者が出荷者登録をして商品を持ち込み、販売手数料を差し引いて売上げが支払われる、という仕組みは各地でよく見られますので、ここでは上級編として、あるいは「スモールビジネス」の先にある本格ビジネスへの移行モデルとして、浄安森林組合婦人部ききょうの会(岩手県)の事例を取り上げます。

6坪の手作り小屋で スタート

平成4年、集落11軒の農林家が手作りの産直施設を作りました。きっかけは、育てた生花を市場に出しても値が付かない状況に「自

分たちで売ろう」と女性たちが決起したこと。ご主人方も協力的で、「花の季節が終わる前に」と翌月には6坪の無人販売所を手作りしてくれたそうです(写真6)。そこへ、11軒の農林家が朝になると野菜や花などを置き、夕方に料金を開けて集計するというスタイル。この時点では「スモールビジネス」そのものですが、ききょうの会の活動はそこから大きく飛躍しました。



写真6 ご主人方が建ててくれた6坪の小屋で無人販売からスタート

無人販売所の当初の売上げは、4カ月で200万円ほどになったそうです。それだけでも驚くほどの売上げですが、ききょうの会の皆さんはさらに上を目指しました。翌年からは1時間ずつ店番をする当番制を導入。「毎日1時間、家の仕事を抜け出してお客さんと話

できて良い息抜きになった」そうです。商品は置いた途端に売れ、当初は家にあるものを売っていましたが、次第に産直で売る目的で作物を栽培するように。「何を作って売ろうかと考えるだけでも楽しくて」。

この同志たちによって、平成7年に女性林研グループ「ききょうの会」が発足。生産の場が山へと大きく広がりました。林研活動を通じて山菜やキノコの栽培技術を習得し、それらも店頭に並ぶようになると売上げはさらに増加。特に、林床栽培のマイタケはヒット商品で、マイタケだけでも1人当たり30万円/年の手取りとなりました。



写真7 林床栽培のマイタケは、廃菌床を1人で年間1000個ほど仕入れ、林床で2年間発生させている

※ 平成30年版情報通信白書(総務省)によると、インターネットで購入する際の決済方法は、「クレジットカード払い」(72・7%)が最も多く、次いで「コンビニエンスストアでの支払い」(34%)、「代金引換」(29・6%)、「銀行・郵便局の振込・振替」(26%)となっています。

した（写真7）。
売上げと比例するように、6坪からスタートした手作り施設は建て増しを繰り返して12坪に。それでもまだ手狭だった上、満足な駐車スペースもなく、「掘っ立て小屋」では冬の営業ができませんでした。

年商2000万円の産直施設へ

そこで意を決した皆さんは、総工費2000万円をかけ建坪43坪の施設へと建て替えたのです。補助金を活用しても各

家の負担が相応にあり、慎重論もありましたが、話し合いを重ねて決断しました。

建て替え後は通年

営業が可能になり、近隣農家からの商品も置くようになりました。商品管理のためのバーコードも導入。会計も当初はノートに売上げを綴る程度でしたが、今や農協職員のメンバーが会計を担当し、10

営業日ごとにお母さん名義の銀行口座に売上げが振り込まれるとのこと。

施設の名は通称「浄南ママ直」（写真8）。ママの直売所、という見事なネーミングですね。県道沿いで観光名所にもなり、年商はなんと2000万円。それでも「産直はあくまでも副業。本業がそれぞれの家庭にあり、売上げが多くても少なくともお互いが認め合っているから続けてこられました」。毎日メンバーが顔を合わせる家



【産直施設の運営】年商2000万円の「浄南ママ直」
写真8 平成12年にオープン

族のような産直施設は、継続20年以上。お客さんに喜ばれるものを作って持ち寄った農林産物が、今日も店頭で賑やかに並んでいます。この事例から読み取れることはなんでしょうか。1つには、最初から欲張る必要はない、ということ。労力も設備投資も最初は手の届く範囲でスタートし、技術



チームワークで楽しく、山のスモールビジネスを！
写真9 浄安森林組合婦人部きょうの会（岩手県）

（生産技術、販売技術）を磨きながら、手応えを十分に掴んでから設備投資等の規模を拡大する、という流れでした。

もう1つには、運営の工夫です。特にグループとして取り組む際には、役割分担が欠かせませんが、ききょうの会の皆さんは、店番を1時間ごとに交代で担当したり、仕事（農協職員）で慣れた方が会計を担当したりと、施設運営が上

手く回るように工夫されていました。そして、その当番自体が「家の仕事を抜け出して、息抜きになる」時間だったとも語られています。さらに「お互いを認め合う」という姿勢が長続きのコツだとも。グループでビジネスを始める際には、集まった各人にそれぞれ活躍の場があり、得意分野を活かせ



写真 10-1 地粉でうどん作り体験

る仕組み作りが必要だと分かります。企業に例えれば、企画担当、営業担当、広報担当、腕利きの技術者、表に出るのは苦手でも裏方作業は完璧な人、それらを束ねるマネージャー役……。そんな仕組みができれば、自ずと活動も楽しく、息の長いものになってくることでしょう。

④ 森林・林業のPR

ここまで、製造・加工、商品開発・マーケティング、流通・販売と見てきましたが、「山のスモールビジネス」では、もう一つ大事なポイントがありそうです。それは、「食」を通じて森林・林業をPRする効果、地域を知ってもらいファンになつてもらう効果です。「食」での直接的な経済効果よりも、ずっと大きな流れを生み出す可能性があり、見逃せない重要なポイントです。そして「食づくり」に取り組む女性林研の皆さんの多くが既に多く実践されている活動でもあります。

その代表として、東吾野女性林研ときめ木（埼玉県）の事例を見てみます。ときめ木の皆さんは、

山村の文化や環境保全に果たす林業の役割を都市住民に伝えたいと考え、市が取り組むエコツーリズム（飯能市エコツアー）に参画しています。都市から訪れたツアー参加者に、様々な森林・林業体験メニューを提供するのです。

スギの葉染め体験の待ち時間に提供するという、様々な「食」の話題が出てきます。ブルーベリー狩り、地粉のうどん作り、炭酸まんじゅう（郷土菓子）作りなど……。そして昼食には、地元の野菜を使って手作りした郷土料理を振る舞い、好評を博しているとのこと。

エコツアーの一環で提供するメニューですから、それらすべてが収入源（＝スモールビジネス）という見方もできます。しかし、参加者にとっては、ツアーの合間に聞く林業の話題とセットとなることで得難い森林・林業体験となり、その後になって大きな効果を生み出す可能性があります。相手が子どもたちであればなおさらです。

ときめ木の皆さんに限らず「食づくり」活動では、お客さんと直接顔を合わせ、会話・交流する機

会の多いことが様々な事例の中で語られています。こうした機会に森林・林業のことをさりげなく伝えることも、非常に意義深いビジネス活動と言えるのではないのでしょうか。

みんなが主役。得意分野で力を発揮

ここまで、いくつかの女性グループの事例から、「食」を通じた山のスモールビジネスのポイントを見てきました。共通するのは、身近にある材料、最初から大きな投資は不要、仲間と協力してやる、

苦労や課題はチームワークや創意工夫で乗り越える、などです。それらができれば、スモールビジネスを立ち上げられる、とも言えます。

皆さんがこれからスモールビジネスを始めるとして、目指すものはなんでしょう。少しでも収入を増やしたい。経営

の1つに組み入れたい。当たり前じゃないか。そんな声が上がるのはごもつともです。しかし、様々な事例を注意深く見ていくと、必ずしも収入「だけ」のために活動に取り組まれているようには感じられません。



写真 10-2 料理の実演で腕を振るうもよし！

を発揮する。その活動そのものが大きな喜びであることが伝わってきます。

さらに言えば——「お客さんの喜ぶ顔が見たい」という純粋な気持ちたちが活動の源泉、エネルギーの元となつていると言えないでしょうか。作る過程でも販売する過程でも、買ってくれる人、食べてくれる人のことを考えながら、「喜んでほしい」という一心で取り組む。その結果として収入が生まれる。そんな考え方です。

「山のスモールビジネス」ではお客さんと1対1の関係が基本です。大きな流通ではない分、お客さんの喜ぶ顔が直に見られ、そこが張り合いでもあります。お祭りの模擬店のような形からでも始められます。お客さんが喜び、自分たちの喜びにもなる、そんな食づくりの「スモールビジネス」に、ぜひ仲間の方々と取り組んでみてはいかがでしょうか。



写真 10-3 地元の野菜を使った料理でおもてなし

グループ活動の「クラフト」編

次は樹木（木材、枝葉）やつる植物など、山で調達できる資源を利用したクラフト作り・販売です。作るのはまだしも、流通・販売となるとなじみ・経験がなく、手強いと感じてしまう。多くの読者に共通の思いかもしれません。ここでは、流通・販売を含め、上手

な売り方へ繋げるマーケティングを中心に、スモールビジネスの流儀を考えてみたいと思います。

まず、マーケティングの考えを整理しよう

いきなり売り方を考えても、いいアイデアはなかなか浮かびません。一般ビジネス流儀に沿って、商品売る土台となるマーケティングについて整理してみよう。マーケティングは、「4P」の原則でよく整理されますので、これに沿って考えてみましょう。

マーケティングの原則「4P」

- ・ P（プライス・価格）一価格をどう設定する
 - ・ P（プロダクツ・商品）一市場が求めるどんな商品を作る
 - ・ P（プレイス・場所）一作った商品をどこで売る（流通チャンネル）
 - ・ P（プロモーション・販売促進）一商品及びその背景を含めた販売促進
- そして、山のスモールビジネス

では、以上の4Pに加え、
・ P（パーソン・人・地域）一作り手の顔、作り手が暮らす地域（環境、文化）
を大事にするマーケティングを考えてみましょう。

流儀① P（プライス）
一価格をどう設定する

販売価格（単価）は、顧客が商品に感じる価値や生産コスト、利益を踏まえて設定するという原則があります。

価格は、一般に考えられている以上に判断要素が複雑です。例えば、価格が安いほど売れる、という原則が通用しない場面はいくらでもあります。商品の性能（価値）にさほど差がない場合（卑近な例ではティッシュペーパーなど）、低価格なほど売れるということは言えます。しかし、クラフトではどうでしょう。そうした原則は通用しないかもしれません。

逆に、あまり価格が低いと「それなりの商品」だと判断されてしまいかねません。すなわち、「価格は価値を表す」とユーザーが考える商品ジャンルがあるということで、クラフトはこれに該当する

と云っていいでしょう。

「山のスモールビジネス」は、低価格で（ライバルより）たくさん売るやり方、量で勝負するビジネスではありません。ですから、価値をしっかりと消費者に評価してもらう価格をねらって設定するという考え方があっていいはずです。

自分たちが作るクラフトに類似の商品があれば、もちろんその市場価格を調査するデータ収集は必須です。しかし、データはあくまでも参考です。自分たちが考える価値を価格に思いつきり表現する、それを市場で評価してもらうという積極策が面白いかもしれません。遠慮する必要はありません。

まずは商品の価値を伝えたい顧客層を設定し、何を伝えるか、目的をはっきりさせることがスタートです。事例に沿って見ていきます。

事例① 付加価値を高めた価格設定

価格の設定について注目したい事例が、「あしよろ岐志会」（北海道）の「ウッドキャンドル」（写真11）



写真11 雪原を炎で照らすカラマツのウッドキャンドル

です。ウッドキャンドルとは、手で持てる大きさの短材の木口にチエーンソーで切り込みを入れ、中心部に火をつけて使用。炎で周囲を灯したり、野外での煮炊きに使うためのものです。

直径20〜30cm、高さ40cm程度のカラマツ材、ミズナラ材でできたウッドキャンドルを「町の観光協会」で1つ1500円から販売」とありました。本来の材価を考えれば、「思い切った価格設定だな」と感じる方もいるのではないのでしょうか。これは、もともとの材に

加工を施して付加価値を高め、消費

費者ニーズ（使用場面や目的）に沿った商品化を行った賜物でしょう。価格が高いか安いかは、消費者が判断します。

ちなみにこのウッドキャンドルは、足寄町のふるさと納税の返礼品にもなっています（H30・9現在／編集部調べ）。

事例② 100円店と競合しない

クラフトの価格設定について、大きな示唆に富む好事例があります。「こもればの会」（栃木県）でのクラフト作り・販売の事例です（写真12）。



写真12 人気の商品。右からブドウの蔓のペンダント、ドングリのプローチ、ヒノキのたわし

ことで、お客さんから認められて売れるでしょう、安かろう悪かろうでは売れませんよ、という趣旨のアドバイスです。

流儀② P（プロダクツ） 市場が求める どんな商品を作るか

ここがもの作りの出発点でしょう。単に自分たちが製作できるもの、作りたいものを作り、それを商品にするという手法では、市場で通用する可能性は低いと見ておく必要があります。既存市場にあるクラフトでの勝負も避けたいところです。

こもればの会では、東京にある栃木県のアンテナショップでクラフトの販売を行っています。店長から「100円ショップの安物と競合しない商品を作り、適正な値段設定をすること」というアドバイスを受けたそうです。その商品の価値を高め、価値に見合った価格を設定する

商品開発には、山の材料の価値を見極める眼が必要でしょう。そのツボさえ押さえれば、既存商品分野であつても、「デザインが新しい」「材料が新しい」などで、クラフト商品の新たな価値を創出できるかもしれません。

こんなエピソードがあります。雑木林に生える広葉樹の木を製材してみたところ、その多様かつ豊かな材色が主婦層女性たちの高い評価を得たことがあります。山（林業側）の視点では用材（建築・家具などの材）にはならない雑木だという「思いこみ」の評価から、いったん離れる視点も必要かもしれません。

では、山のクラフトとして、手作り（感）あふれる商品はどうでしょう。しかし、手作りの良さはあくまで二次的評価です。品質の良さ、技術の裏付けがあつてこそですから、「手作り」だけに頼ることはできません。

商品開発には、価値を見出す多様な眼（年齢、性別、業務経験など）をどう揃えるか、という人探しから始めるのも一法です。

また、専門家のアドバイスを活

かすことも考えたいものです。都道府県の林業センター、工業センター、大学研究室などに遠慮なく協力を仰いでみるのもいいでしょう。農林水産の6次化に積極的に取り組むこれら研究機関もありますから、これはという専門家を訪ねてみてはいかがでしょうか。

本編で紹介している「山のスモールビジネス」は、言い換えると山の6次産業化です。国・自治体では6次産業化のサポート（講習会、6次産業化プランナー等専門家アドバイスなど）を無償で行っていますので、ぜひこうした公的アドバイスも参考にしてみてください（6次産業化サポートについては、インターネットで「6次産業化サポートセンター」で最寄りの機関を検索してみてください）。

事例③ 材の色・杳を生かす

田人林業研究会（福島県）では、木のボールペン作りを行っています。木材をロクロで削り出し、ボールペンの軸にするものです。使用する木材に既存商品にはない魅力がありました。

「クリ、コシアブラ、スギ、ヒ

ノキ、ケヤキなど地域産材」を材料とし、「当会員が、地元の素材生産の現場で見つけてきたものを3年ほど寝かせて乾燥させ、その後刻んだものをさらに1年以上乾燥させたもの」を加工して作ったボールペンは、「様々な色の材、見事な杳を生かしたボールペンとなりました」。イベントでの販売時は、「樹種による木目の美しさ」が毎回好評とのこと（写真13）。ボールペン自体は全国どこにでもあります。山にあ

る身近な材料の使い方を工夫することで、既製品にはない「一点もの」の価値を生み出すことができます。

事例④ 手づくりの素材な雰囲気

木のボールペンと同じく、山の素材の価値を最大限に引き出した事例の1つが、あけびの会（埼玉県）が製作する「つるかご」（写真14）です。「樹木に絡んだじまなつるを利用して何かできないだろうか」が発端で始めたつるかご作り。山側からすると「邪魔者」でしかなく

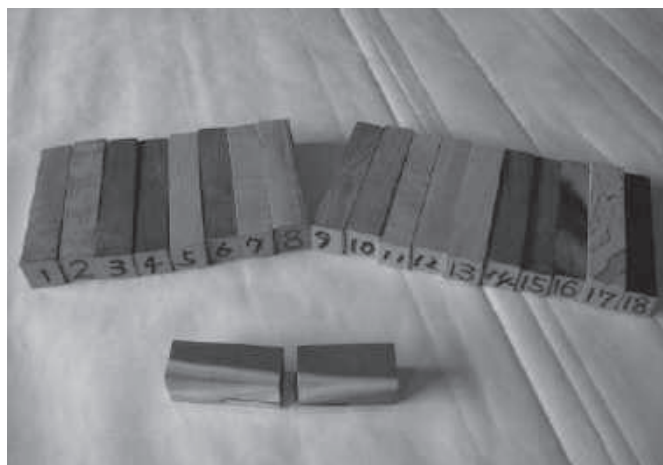


写真13 様々な樹種の材をボールペンの軸に

いつるが、市場が求める商品になります。工夫次第でいろいろな形のかごができます。太いつるでダイナミックに編んでも良いですし、細いつるで目の揃ったかごを作るのも良いでしょう。自然の素材なので同じものができないのも楽しみの1つです。

素材自体の風合いも商品の魅力です。手



写真 14 素材の風合いと手作り感がマッチ

作り」の素朴な雰囲気
が商品の価値に繋がっている好例と言えるでしょう。

事例⑤ 子ども心に訴える

対馬林業研究会（長崎県）では、地域材「対馬ヒノキ」を使用した様々な木製品の製作・販売を行っています、その一つが「サイコロカレンダー」です。この事例もまた、素材のもつ長所を巧みに商品に取り入れていると言えます。

ヒノキ材を5cm角のサイコロ状にして、その6面に文字や数字のシートを貼ってカレンダーにしたこの商品、「イベントの展示・販売で一番

の人気商品」とのこと。市場には類似の既製品もたくさんある中、「サイコロ

カレンダー」は子どもたちに人気なのだそうです。きつと、ヒノキ特有の香り

や肌触り、日頃使う実用的なものでも遊び心がある、という部分が子ども心に訴えるのでしょうか。

事例⑥ 五感に訴えるクラフト

子ども心に訴えるという点から、加賀林業研究グループ（石川県）の「バードコール」（写真15）にも注目してみます。

この事例では、イベントでのクラフト体験としてバードコール作りを行ったところ、「100セツトほどの材料を準備しましたが、あつという間になくなりました」という人気ぶり。やはり、特に子どもたちに大人気だったとのこと

です。
バードコールとは、鳥の声に似た音を鳴らして鳥を呼び寄せよう



写真 15 木の枝で作るバードコール。
ボルトを回すとキュウキュウと音が鳴る

という道具です。木の枝と市販の建築金物だけというシンプルな作りですが、子どもは、実際に鳥の声がすると満面の笑顔になり、首からバードコールをぶら下げて大喜びです。

一般的に、音や香り、手触りなど、五感を刺激する商品は子ども受けが良いもの。そういった素材や商品アイデアを研究することも、「市場が求める商品作り」の一環です。

流儀③ P（プレイス） ——作った商品をどこで売る（流通チャンネル）

売る場所は重要です。道の駅で売なのか、既存流通に乗せ、専門小売店の実店舗で売なのか、ネット販売か、直販で売なのか。それ

ぞれ、販売対象層を調査し、売る場所（プレイス）の購買者層を想定した商品作り、パッケージ、製造（ロット）、販売数量、納期などを判断する必要があります。既存流通ではロット、納期を守らないと相手にされませんから、ハドルは高くなります。

山のクラフト成功事例を見ますと、ネット販売、直販などでの健闘する例が多いようです。

山のクラフトでは、場所に合わせた販売方式の工夫・改善も考えられます。例えば、直売所に生産者が常駐し、商品の特色はもちろん、材料や製造技術の特色、産地の特色、生産者グループの人となり、などを対面で顧客に説明することで販売を拡大する方法です。

事例⑦ 対面形式の体験型販売

山のスモールビジネスと親和性の高い対面での販売で、体験型の

手法が行われている事例が多く登場しています。いわゆる、クラフト体験です。

販売（有償）もあれば無償の例もありますが、対面という流通チャンネルの一例として、阿東女性林業研究会（山口県、以下、阿東女性林研）の「こけ玉」（写真17）を取り上げます。



写真 16 対面販売の例

こけ玉は、球状にしたミズゴケに山野草などをあしらひ、フワフワアレンジメントのように楽しむもの。阿東女性林研の皆さんがこけ玉に注目したのは、都市部のショッピングセンターで行った林業女性グループの作品展にこけ玉を出品したところ、予想以上に好評だったからです。

その狙い通り、
「こけ玉作りは
各種イベントでも大変人気があり、小さな森の癒しとして皆さんに喜ばれています」とのこと。
また、「体験イベントをしていると、通りが

りの方から『以前のイベントでこけ玉作ったよ！ 大切にしているよ！』などと声を掛けていただくこともあり、会員としてもとてもうれしく思います」とありました。
グループ活動をしていると、各種イベントに出展する機会もあるはずです。そうした場で、クラフト体験を含めて対面販売を行うこ



写真 17 こけ玉

とは、比較的ハードルが低いのではないのでしょうか。

さらなるメリットとして、対面での販売は、作り手（売り手）からのメッセージを直接顧客に届けられると同時に、顧客からの反応もダイレクトに返ってきます。これは、「ビジネス」を考えた場合、マーケティング活動そのものでも

あります。

事例⑧ オフィシャルショップでの販売

事例②で取り上げたこめびの会について、再度見てみたいと思います。

先述したこめびの会では、東京にある栃木県のアナテナショップでクラフト販売を行っています。

自分たちのクラフト商品が、栃木県代表の商品の1つとして東京のお客さんの目に触れる、絶好の機会に恵まれたわけですから、誰もが商品に並べられるわけではなく、審査を通して販売が可能になり、新たな商品作りのために外部講師をお願いして講習会も重ねたのとことです。

このように、地域の特産物を扱う「オフィシャルショップ」は、各地の市町村内にもあるはずです。そこでの販売を目指すことも目標の1つとなるでしょう。

事例⑨ 行事の記念品として受注

オフィシャルな販売の場という事例を、もう1つ見てみましょう。和歌山県林業研究グループ連絡協議会女性林研部会による「押し花マグネット」(写真18)です。4cm四方のヒノキ板の上に押し花をあしらひ、下にマグネットを貼った可愛らしいクラフトです。

地域のイベントで押し花マグネット作り体験を続けるうちに評判となり、平成23年度の全国林業後継者大会ならびに全国植樹祭の記念品として「3600個の注文を



写真18 押し花マグネット。
作る人のセンスでいろいろな表情が生まれる

「森の巨大リース」です。つるやスギの葉を使つて作る、直径2mにもなる巨大なリースです。このリース(クラフト)の特徴は、街を彩るアート作品として使用される点です(写真19)。「Waのまちもりおか」絆の輪プロジェクトに、森林素材

の提供を通じて参画した皆さんの街中に展示される巨大リースの製作を手掛けることとなったのです。つまり、特注品の製作とも言えるでしょうか。「岩手県の木がナンプアカマツ」ですので、岩手らしさをPRできたかと考え、花の中心にアカマツの松ぼっくりを置き、花びらもアカマツの経木で作りました」。

地域活性化を目指したプロジェクトにリース(クラフト)作りで加わり、その作品が街を彩る。「売る場所」を超え、街全体が「山の

いただき、会員総出で作成し、納品しました」。毎年ニュースで放映される全国行事の記念品に採用され、県から大量に受注する。もはや「スモール」とは言えないビッグプロジェクトです。

事例⑩ 街を彩るアート作品

「売る場所」についての最後の事例は、ちょっと異色ですが、「山のスモールビジネス」の1つとして注目したい事例です。

林業研究グループ盛岡市森林組合青年部(岩手県)が製作する



写真19 直径2m、街を彩る巨大なリース

スモールビジネス」の舞台となる
——そのように受け止めることも
できる事例ではないでしょうか。

流儀④ P(プロモーション) —商品及びその背景を 含めた販売促進—

TVコマースシャル、イベントなど華やかな販売促進とはひと味もふた味も違う手法の工夫が必要です。もちろん企業のように潤沢なPR資金はありませんから、手弁当的な販促になります。クラフト作り仲間の人脈からスタートする口コミをスタートに、自治体の広報誌、専門誌など、普及員さんの協力を得て記事として取り上げてもらう活動は、地縁を活かした山のスモールビジネスならではの手法です。

もう1つは、「インフルエンサ―」の協力を得た情報発信です。インフルエンサ―とは、他の消費者に大きな影響を与える人のことです。皆さんの友人・知人関係を探せば、SNS(フェイスブックやツイッターなど)での情報発信が上手な人(インフルエンサ―)が何人かはいるはずです。そうした人へ、販促対象の商品情報を

提供(いわばプレスリリース)し、
情報を発信してもらえば、伝播力
は一気に高まります。

その際に提供する情報は、

◆商品の概要、特色/機能、材料、
加工技術、など

◆商品に関するエピソード/誕生
の経緯、アイデアのきっかけ、
など

◆作り手の情報/製作グループの
プロフィール、特技、産地の情
報、など

◆以上に関する豊富な画像などを
パッケージする必要があります。

事例⑪ インターネットで 口コミが広まる

「ぼけない君」(写真20)という
クラフトがあります。スギの1枚
板を盤面に使い、ビー玉を移動さ
せるゲームです。製作・販売して
いるのは美郷町北郷女性林研グル
ープ(宮崎県、以下、美郷町北郷
女性林研)の皆さん。メディアに
取り上げられることも多く、ご覧
になった方も多いのではないでし
ょうか。

「ぼけない君」というキーワー
ドでインターネット検索すると、



写真 20 長寿のヒット商品「ぼけない君」

第三者の意見なので
購入時に参考となる
ことは、皆さんにも
経験があることでし
ょう。

この事例からは、
思わずブログやSNS
で発信したくなっ
てしまうファンを1
人でも増やすことが
大切だとわかります。
そのためには、美郷
町北郷女性林研の皆
さんのように、長
年、地道にPRに励
む必要があるそうで
す。一朝一夕にはいかなところ
に、難しさと楽しさがあります。

流儀⑤ P(パーソン) —作り手の顔、 商品が生まれた地域 (環境、文化等)

流儀4までの「4P」が一般的
なマーケティングの原則になりま
すが、山のクラフトではもう1つ
の「P」を加えてみたいものです。
それは、作り手の顔、商品が生ま
れた地域といった人・地域を前面
に出すコンセプトを大事にする考

え方です。商品開発や売り方、そしてなによりプロモーションの場面において、5番目のPを強調するのが山のスモールビジネスならではないでしょうか。

例えば、地域材料の特色を全面に出した商品開発、地域名を活かした商品ネーミングです。また、商品が生まれたきっかけ、誕生の物語、それに汗を流した人々の素顔など、商品の背景にある温かな情報が顧客の心を掴みます。それほど、作り手の顔、地域

には商品ブランド力が備わっているということです。これを活かさない手はありません。

事例⑫ 地域ブランドを生かした ネーミング

「山のスモールビジネス」で、人・地域を強調して取り組む事例は、これまでご紹介した全事例が当てはまると言っても過言ではありません。

その中でも「飢肥杉手すき和紙」を制作する日南地区林業研究グループ

連絡協議会（宮崎県）について見てみましょう。

まず、商品名に「飢肥杉」という地域を代表するブランド名が入っています。これだけでも地域の林業の歴史、素材としてのスギの特徴など、たくさんのメッセージを発信できます。そして、スギから和紙を作るという意外性。「……飢肥杉で紙を作れないかという声が上がリ、試行錯誤を重ね、飢肥杉手すき和紙を完成させまし



写真 20 細かくした内樹皮と水、糊を混ぜて紙をすく

た」とのこと。手間をかけてスギの内樹皮を繊維状にし、紙をすくまでの工程を完成させたエピソードからは、作り手の熱意や体温がストレートに伝わってきます。

これは紙すき体験活動についての記事でしたが、紙すき体験を通して「飢肥杉の魅力」をPRしてきまして」とあるように、活動自体は「山のスモールビジネス」そのものです。

楽しむだけの クラフト作り から少しでも 収入を目指そう

クラフトによる山のスモールビジネスで収入（多少を問わず）を実現するために、マーケティングにおける4P（価格・商品・場所・販売促進）、さらに山のスモールビジネスならではのP（パーソン／人や地域）という5Pに沿って、全国の林研グループが実践して



写真 21 ポップの手作り。
日本的な風情のクラフトは外国人にも好まれます

いる事例を見てきました。いきなり本格的なビジネス参入は難しくても、できることからマーケティングに取り組み、自慢のクラフトで「山のスモールビジネス」を実現してみませんか。

第3部

私たちのチャレンジ！

人づくり、

モノづくり、

山づくり

事

私たちのチャレンジ！

例

会員参加への呼びかけ、 稚樹の苔玉づくり、アロマ香水

飛驒フォレストレディース「岐阜県」

山の恵みを生かす 女性林研

飛驒フォレストレディース（以下、当会）は、岐阜県の飛驒地域（高山市、飛驒市、白川村、下呂市）に住む女性10名で活動している女

性林業グループです。

活動の目玉は「とやま森の祭典」への参加で、メンバーが採取した山菜、挿し木や山取り稚樹を使った苔玉、試作したアロマ香水などを販売し、例年好評を得ています。

ほかに、飛驒地域の山の植物を観察する研修や、原木キノコの植菌、女性ならではの活動として、キノコや薬用樹の木の芽の天ぷら、山菜ピザ、どんぐりクッキーの調理・試食、ドライハーブ入り人形の制作などを行っています。

新会員は 森林組合の職員

会員が高齢化し、減



私たちのグループの期待の星、大塚薫子さん



とやま森の祭典での販売

少する中、平成27年に若手のホープとして入会したのが、大塚薫子さんです。彼女は大阪生まれで子供の頃は毎日外で遊び、ガールスカウトにも入っていたとのこと。その後岐阜へ引っ越し、自然に興味を持つようになり、大学は理学部の地球科学・環境系の学科へ。卒業後は野外に出るような仕



飛驒フォレストレディースのメンバー
（前列の左端が大塚さん）

事に就きたいと、平成26年に高山市・白川村を管轄する飛驒高山森林組合に就職しました。

入会のきっかけは、当会の事務局に声をかけられたことです。平成26年の「とやま森の祭典」での



作品の一部。上から、稚樹の苔玉、ドライハーブ入り人形、木の芽天ぷら・山菜ピザ



自然探索・登山（天蓋山）



「仲間を増やしたい！」と大塚さん

大塚さんに話を聞いたところ、
「仕事では、現場で伐採した木が、
森林組合直営の工場や製
材工場を経て目の前で製
品化されることから、林
業への関わりを実感でき
るようになりました。当
会の活動に参加し、会員
の皆さんが植物・林産物
に関する知識が豊富で、
何よりもその知識を日常

「地元の人の グループ活動を 知ってもらいたい」

決意したそうです。

生活に生かしていること、山が生
活の一部になっていることに驚き、
それまで見てきた世界との違いを
すごく新鮮に感じました。若手の
会員ということで特別扱いされる
わけでもなく、対等に扱ってもら
えるので、気兼ねなく参加し、勉
強させていただいています。平成
28年に全国林業女性大会に参加し、
ほかの女性林業グループも会員の
高齢化と減少が問題になっている
と知りました。一見敷居が高い林
業ですが、林業グループはその地
域に密接に関わっているものなの
で、地元のイベントに出店して、
まずは地元の人にグループの活動
を知ってもらい、仲間が増えれば
いいな」とのことです。そんな大
塚さんと共に活動を盛り上げてき
ました。

＊まとめ
事務局 原 彰良

事

私たちのチャレンジ！

例

じょうぼうじうるし

浄法寺漆の安定供給に向けて

じょうあん
浄安森林組合青年部「岩手県」

国宝の修繕にも
使われる上質な漆

現在、国内で消費する漆は、ほとんどが外国産で、国産漆は約3%となっています。国産漆の70%が岩手県三戸市浄法寺町で採れたものですが、浄法寺町産の漆は特に上質であるといわれています。主に漆器の製作に用いられますが、品質が良いことから、国宝

等の修復にも用いられており、現在、日光東照宮などの重要文化財で修復に使われています。

原木林の育成・
確保が課題

浄法寺漆は、昭和60年頃までは年間3t近くの生産量を維



漆苗木の植栽



漆の成木



漆掻き。樹皮に傷を付け、しみ出る樹液を採取します

持していましたが、安価な外国産に押されて国産漆が使われなくなったこと、職人の高齢化に伴う後継者不足などにより、現在では1tを下回っています。

しかし、国宝等の修復に国産漆が使われ始めたことで需要が増え、生産量が増加してきています。ただ、これまで輸入漆に頼ったことが災いし、放置され手入不足の漆



浄安森林組合青年部のメンバー

林が多いことから、漆原本木の育成・確保が一番の問題となっています。

そこで、浄安森林組合青年部では、漆の苗木の生産拡大など漆の生産を手助けしながら地域を盛り上げる取り組みを、二戸市と森林組合と共に進めてきました。

これまでの植栽本数は1万6700本、面積では約14haとなっています。



漆掻きを終えた木

地元中学生の 植栽体験

地元の人に漆を知ってもらうため、「漆の森」で毎年行われている



植樹の際には「ゴム手袋等を必ず着用」「苗木の根に触らない」ことを徹底。また、雨天のため着用したカップが、かぶれ防止に効果的でした

る漆苗木の記念植樹に、平成26年度から参加しています。また、地元の中学生と共同で学校林に漆を植栽する植樹祭や植栽地の下刈り等を実施しています。木から滲出した漆は皮膚につくとかぶれやすいため、植栽を実施する前は、先生やPTAの方から、「ほんとに生徒は大丈夫？安全なの？」とい

う声が多く寄せられました。そのため、ゴム手袋等を必ず着用する、苗木の根に触らない等、安全に植栽するための注意点を説明し、自分たちのいる地域には全国に冠たる漆の文化や伝統があるという事実や、漆の木を植える意義を理解してもらいたく何度も交渉を重ね、納得してもらったうえで、植樹祭



学校林での植樹祭に参加した中学生

を開催しました。

国産漆の良さが注目され、需要が増加している今日、地元・浄法寺町の小学生も盛岡駅で漆の生産増加を呼びかける募金活動を行うなど、漆増産に向けた関係者の取り組みが活発になってきています。青年部では、日本一の生産量を誇る地域として、漆のさらなる生産量の向上に、地域と一体となり取り組みでいきたいと思っています。

＊まとめ

浄安森林組合青年部
部長 小田島行伸

事

みんなの人気者

例

定年退職後に故郷で林業に目覚める

頸北林業研究会「新潟県」／古澤俊朗さん

退職後にUターン。
林業に目覚める

頸北林業研究会は、新潟県上越市吉川区を中心に平成19年から活動していて、現在は森林・山村多

面的機能発揮対策交付金事業を中心に取り組んでいます。

わが林研の人気者、

古澤俊朗さん（66歳）は、大手電機メーカー

の製品開発部門を退職後、第二の人生を過ごす場所として故郷を選

びました。今の住居は上越市の中心部にあり

ますが、義父の旧宅地が上越市牧区の山間地

にあります。生まれてこの方、農林業とは全

く関わりのない生活でしたが、牧区の屋敷

跡の草刈りなどの管理をしているうちに、林業に目覚めたといいま

す。里山や里道を整備すると、美しいブナ林、カタクリや山菜の群生地が復活し、達成感がありました。荒れた山林を再生したい、と

いう強い思いから、森林組合の森林整備研修会に参加。その縁で平成25年に林研に加入しました。途中加入に関わらず、結成メンバーのように行動しています。

チェーンソーを
こよなく愛す

チェーンソーをこよなく愛する古澤さん。まず装備からこだわり、チェーンソーの型式やソーチェーンにこだわります。

「35cmガイドバーのトップハンドルソーは、小型軽量で竹伐採等の厳しい環境でも小回りが利くので重宝するが、バーが自分にも向きやすいので振り回すことがないように注意する。40cmガイドバー



伐木作業中の古澤さん



頸北林業研究会のメンバー
（前列が古澤さん）



里山の広葉樹を伐倒中の古澤さん

のプロ用チェーンソーはパワフルで、中径木の受け口づくりや伐採では高いパフォーマンスを発揮するが、間違った切り方をした時の反動も大きいので、跳ね返りの動きを想定して作業する。そうした機種の特性を把握した上での使い分け、操作している時の適度な緊張感が魅力」

こうした「うんちく」を語る言葉にも熱が入り、それを聞く私たち会員をぐいぐい引き込みます。

古澤さんは積極的で、尻込みし

そんな現場の伐倒もこなしてくれます。頭が下がるのは、雨にも負けず、風にも負けず、雪にも夏の暑さにも負けず、片道25kmを通過して活動を続けていることです。年数回、大阪の自宅の管理のために出かける時以外は皆勤です。雨の日も雪の日も、合羽を着て作業するという話を聞いたある会員曰く「そこまでやるか!」。それほどチェーンソー作業が好きで、林研活動に熱心に取り組んでいます。

さらに、県の林業入門講座と最寄りの森林組合の研修会に年1回は参加すると共に、林業研究会の安全講習会にも必ず参加して、目立てや伐木の技術を磨いています。

**可能性を
秘めた
林業の魅力を
伝えたい**

古澤さんは、いつも会話の輪の中心にいて、いつも人を笑わせます。



休憩時の会話の話題も豊富



チェーンソー談義に花が咲きます

上越地方の言葉は標準語に近いのですが、その上越の方言を長年親しんだ関西弁のイントネーションで話すので笑いが一層高まります。そんな人柄のなせる技か、年に1人は新入会員を誘い入れ、彼らの

面倒を見てくれます。皆から非常に頼られる、林研になくてはならない存在です。

古澤さんは「林研には様々な経験を積んだ人が参加しているので、多くの刺激を受けながら活動できることが素晴らしい。四季折々に若葉や紅葉に彩られ、山野草が咲き、そこで子どもたちが遊ぶ里山を復活させたい。樹木や森林の大切さを広めるとともに、可能性を秘めた林業の魅力を伝えたい」と語ります。

今日も古澤さんのチェーンソーの音が、山に響きます。

＊まとめ

事務局 江村 豊



頼りになる存在、古澤さん

事

私たちのニューフェイス

例

父の背中を追って夫妻揃って山へ

多賀町林業研究グループ「滋賀県」／小森啓之さん・奈巳さん夫妻

人工林資源の活用を目指す

多賀町林業研究グループ（以下、当会）は、滋賀県の東部に位置する多賀町を拠点に、男性22名、女性3名の合計25名で活動しています。多賀町は町面積の約86%が森

林ですが、そのうち約61%を占める人工林の資源が充実してきていることから、近年は搬出間伐の実践に力を入れているところです。

新会員は、仲良し若夫妻

林業の今日的課題として林業従

事者の高齢化・後継者不足をよく耳にしますが、当会も例外ではありません。そんな中、平成29年に新たに入会してくれたのが、小森啓之さんと奈巳さんの30代の夫妻です。奈巳さんは多賀町で林業を生業とする家庭に生まれ、山仕事に従事する父・公一さんを見て育

ちましたが、特に林業に興味はなく、電気工事士をしていた啓之さんと結婚して、京都府で暮らしていました。

ところが、結婚後1年程たった頃、啓之さんが公一さんから「林業をする若い人が居ないから、手伝ってほしい」と言われ、これまでにその仕事を見たり手伝ったりして関心を持っていたため、滋賀県に帰って多賀町の大滝山林組合で公一さんと共に働くことになりました。

奈巳さんも、父と夫の仕事を見ているうちに山に関わる仕事がしたいと思うようになり、現在では一緒に大滝山林組合で働いています。当会には父・公一さんが入会していたことや、林研活動を通じてさらに林業従事者として研鑽を積みみたいの思いから入会したそうです。



架線集材研修で講師の助手を務める啓之さん（左手前）



森林環境学習「やまのこ」で小学生を指導中の奈巳さん

夫は山で木を出し、 妻は山の大切さを伝える

啓之さんは公一さんに師事し、主に集材搬出を伴う間伐作業に従事しています。特筆すべきは架線を用いた集材を行っている点です。

架線集材は伝承が急務な技術であり、若い啓之さんには大きな期待がかかっています。啓之さん曰く、「初めて架線集材作業をした時は、スケールの大きさ、集材の仕組みに圧倒されつつ興奮したのを覚えています。その時の衝撃が消えず、自分も林業架線作業主任者の資格取得に励みました。林業をすると決めた時に『職人』と呼ばれるように頑張ろうと思い、自



間伐現場にて

分の周りの『職人』のやり方を見て、自分ならどうするか、なぜこのやり方がいいのかと、いつも自問自答しながら日々の作業に励んでいます」とのことです。

奈巳さんは、滋賀県で実施している森林環境学習「やまのこ」事業の指導員として、木の大切さ、山の大切さを子どもたちに伝える仕事を主に担当しています。29年度は、県内42校2524人の小学

4年生の生徒を受け入れました。奈巳さん曰く、「子どもたちが森林を大切にする気持ちを持つて成長してほしいですし、その子どもたちの中の一人でも山に興味を持ち、将



左から小森啓之さん・奈巳さん夫妻、父・神細工公一さん、公一さんの息子夫妻



多賀町林業研究グループのメンバー。搬出間伐の実践に力を入れています

来林業に携わってくれと嬉し
いなと思いま
す」とのこと
です。

帰宅後も山仕事
の喜びや苦労
話をするなど仲
睦ましい二人に、
それぞれの技能

を活かしてもらい、当会の林研活動
をさらに発展させていってもらえ
ればと期待しています。

＊まとめ

事務局 多賀町役場産業環境課
木下祐輔（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例

新たな特用林産物「ウバユリ」の研究

佐賀市婦人林業研究会「佐賀県」

根のデンプンを お菓子に

佐賀市婦人林業研究会は、佐賀市の北部山間地に位置する富士町を中心に活動しています。山野草を活かした摘み草料理やシイタケ料理の研究、原木シイタケの菌打ちなど様々な活動をしてきました。その中で平成28年から新たに取り組んでいるのがウバユリの研究です。

ウバユリは、本州以西から九州の林縁等に自生しています。富士町では、このウバユリの根から採ったでんぷん粉（以下、ユリ粉）を使ったお菓子「ゆり菓子」が昔から町の銘菓として親しまれてきました。全国的にも珍しいこの「ゆり菓子」は、お湯に溶き、葛湯のようにして食べます。とろんとした舌ざわりと温かみ、上品な甘さが特徴で、滋養強壮に長け栄養価



ウバユリの花

の一つとすること、②林縁の森林美化、③富士町の観光資源を再発掘することを目指し、私たちの研究がはじまりました。

試行錯誤の ユリ粉採り

聞き取り調査を基に、秋に初めてのユリ粉採りをしまし

が高いことから、町に二千年続く古湯温泉に湯治に来ていたお客様に振舞われていました。

しかし、高度成長期の折からユリ粉を採取する人が減り、現在は本来の原料であるユリ粉が馬鈴薯デンプン粉へと移り変わっています。そこで、ウバユリを採取しユリ粉を採ることにより、①林家の新たな収入源



ウバユリ（女ユリ）の根



佐賀市婦人林業研究会のメンバー



ウバユリの根を採取しています



ユリ根を加工し、ユリ粉採りをしています

の「ゆり菓子」を限定数販売していく予定です。同時に、ウバユリの栽培方法の確立も研究しながら、安定供給を目指します。富士町独自の新たな特林産物として、また、女性だからこそ実現できる新たな活動とし

＊まとめ
佐賀市婦人林業研究会
会長 古賀萬喜子

て、今後もこのウバユリ研究を進めていきたいと考えています。



研究会で作った「ゆり菓子」

た。この時期は地表にウバユリの種が出ているだけで見分けが難しく、ウバユリを探すのにも一苦労でした。苦労を重ねて集めたユリ根を試行錯誤しながらすりおろし、水にさらしデンプン粉を採りました。しかし、約5kgのウバユリの根から採取できたユリ粉は約200gと、わずか4%ほどしか

採ることができず、これではとても商品化は難しいと肩を落としてしまった。収量を上げるため、福岡県で葛粉を採取している老舗のお店に視察に行きました。そして、さらなる聞き取り調査を基に、初夏にもう一度ユリ粉採りをしました。すると、視察の成果もあり、約5kgのウバユリの根から約1・3kgのユリ粉が採取でき、収量が前回の4%から25%へと大幅に上がったので

ユリ粉の安定供給を目指す

す！ 何度か採取を繰り返して、秋よりも春の方が採取に適していることがわかりました。

このユリ粉で「ゆり菓子」を作ってみると、通常の

「ゆり菓子」よりも優しく上品で美味しく、試食をした方たちは皆さん驚いていました。

今後は年一回、ユリ粉100%



東京でも「ゆり菓子」を販売してみました

事

私たちのチャレンジ！

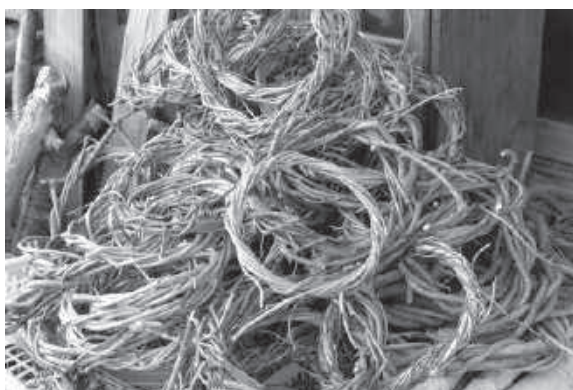
例



広葉樹の植林地での除伐作業



除伐した材を仕分ける



つる材

ており、多くの学校・企業等の団体が訪れます。滞在中のイベントとして木工体験が実施されることも多く、地元の木工職人が、そのインストラクターとして活躍しています。また、県内の障がい者施設や集会施設においても、木

里山の除伐材で木工体験

峡北地区林業研究会「山梨県」

「元気な里山づくり」を
目指して

きた人々です。

本会は、「元気な里山づくり／里山の再生」をコンセプトに、高

樹齢化・敷化した里山の除伐、広

葉樹苗（クヌギ・コナラ）の植林、

植林した里山の維持・管理（除伐

等）を実施しています。そして除

伐したヤマザクラ、リョウブ、シ

ラカバ、つる植物などを木工職人

に提供し、各材の特徴を生かした木工品やクラフト体験・リース体験へと活用を図っています。

除伐材・つる材を
木工体験の材料に

北杜市には、清里・大泉・白州などに都市部の自治体や民間企業・大学などの保養施設が立地し



除伐作業時の
研究会メンバー



木工体験のキット

木工体験のキットを作製します。一度に100〜200人分のキットを用意できるので、多くの団体客にも対応可能です。体験キットは、木工職人のセンスが光りますが、子どもたちにとって魅力的な、カブトムシやクワガタムシといった生き物が中心です。



花や木の実をふんだんに使ったリース

工体験が実施されます。本会では、里山整備で除伐した木々や、つる材を、木工職人に提供し、子どもたちや障がい者・観光客らへの木工・リース体験に活用してもらうことで、除伐材の有効利用を図っています。

キットを使った木工体験

木工職人は提供された

除伐材・つる材をもとに、



子どもたちのクラフト体験

いのですが、こうして積極的に活用することで、豊かな自然の地、里山の魅力をアピールすることができます。

また、木工体験の際には、地域や森の特徴、体験キットの樹種、木の特徴、除伐とは…などについて事前に、本会のメンバーが説明したうえで体験活動を行います。この事前の説明により、多くの子

どもたちが、さらに森や木々への関心を深め、興味を持って木工体験に取り組んでいます。

本会では、広葉樹の苗づくりを「やまなしどんぐりバンク」として独立させ、里山再生に本格的に取り組んでいます。今後は「やまなしどんぐりバンク」で栽培した広葉樹苗を子どもたちの手によって山に還し、子どもたちに



生き物のにぎわいが感じられる木工作品

よって草刈り、除伐等の維持・管理を行い、カブトムシやクワガタなど、たくさん生き物がにぎわい、子どもたちが楽しめる森づくりに着手していきます。

＊まとめ

峡北地区林業研究会
会長 明石益夫

事

私たちのチャレンジ！

例

富原やまんばあば〴〵里山の宝探し

富原婦人林業研究クラブ〔岡山県〕

山の恵みで
生活を楽しく、豊かに

富原婦人林業研究クラブは、県内有数の林業地である真庭市富原地区において昭和56年に結成され、優良材生産に向けた間伐・枝打ち研修や、林業経営での帳簿管理の勉強会の開催等を行ってきました。メンバーは10名。「山の恵みを活かして、いかに生活を楽しく豊かにできるか」をテーマに活動しています。

レシピや料理教室で
野草料理を普及

現在、力を注いでいるのは、山野草の知識を深め、里山の恵みを活かした野草料理の普及や野草を使った商品開発の取り組みです。

平成23年に真庭市が開催し



野草料理の研究と実践



〴〵里山の宝探し。(山野草の摘み取り)



採取した野草

た「里山宝探しゼミナール」でそうじょう崇城大学（熊本県）の村上光太郎薬学博士から野草の薬用効果や調理方法を学んだことがきっかけとなり、現在の活動に至っています。

メンバーは、野草勉強会を重ね、野草を使った新たなレシピを考案してきました。また野草料理教室では、参加者にも野草が見分けられるようアザミ、タンポポ、オオバコ、ハコベ、スベリヒユ等の「食



富原婦人林研クラブの
「やまんばあば」のメンバー

材」の採取体験もプログラムに加えています。

「クズ」をお茶に

新商品の材料として、これまで見向きもされず山作業の厄介者であった「クズ」に着目しました。クズの新芽を使ったくず新芽茶」を開発し、平成24年から生産を始めています。クズの新芽にヒノキ、アスナロ、クワ、クマザサの葉をブレンドしたもので、富原の名産である「お茶」の新たな一品として、真庭市内の商店、農産物直売所、ふるさと祭り等へ出店販売を行っています。当クラブの発案した商品キャラクター「やまんばあば」は、「山姥」をもじったもので、「くず新芽茶」のPRに一



クズの新芽



袋詰め作業の様子



「くず新芽茶」と商品キャラクター「やまんばあば」。

役買っています。

全国薬草シンポジウムで事例発表

平成25年から高校生への環境教育にも参画しており、県立高梁城南高校環境科学科の校外学習では、野草料理を通して、身近な里山資源の大切さを伝えていきます。

こうした取り組みが関係者の耳に入り、平成29年10月には、

「全国薬草シンポジウム」が真庭市で開催されました。県内外から約500人が参加し、薬草に関する50団体が情報交換を行い、そのうち当クラブを含む3団体が事例発表やパネルディスカッションを行いました。企業ではない、いわゆる「婦人ボランティア」による企画立案や商品開発を行う報告事例は少数であり、シンポジウムをきっかけにワークショップのオフアームもくるようになりました。

「野草に出会えたことでクラブの核ができたと思う。足で踏まれる雑草も、使い方によって里山の宝に変貌する。メンバー全員が主役。大きいことはできないが、明



全国薬草シンポジウムでの事例発表

るく楽しく地道に活動していきたい。今後、薬草協議会を立ち上げることも検討している」と戸田温子会長は、次なる目標を述べられました。

里山の宝を探し続けている「富原やまんばあば」の今後の活躍に期待しています。

*まとめ

美作県民局 農林水産事業部

真庭地域森林課

副参事 難波武博

(所属は執筆時)

事

私の夢

例



河北林研メンバーと地域住民の皆さん。

竹林整備の要望があった地域住民の方たちと共に竹を伐り、汗を流しています

アートと林業 森へいざなう林研活動

河北郡林業研究グループ「石川県」／松本拓也さん

彫刻から林業へ

初めまして。河北郡林業研究グループ（以下、河北林研）の松本拓也です。普段は金沢森林組合で森林施業プランナーとして従事する34歳です。

私は、東京都多摩地区の住宅街で生ま

れ育ち、森や山が身近にはありませんでした。そんな私が自然と向き合うようになった大きなきっかけは美術でした。幼い頃から絵や工作が好きで必然的に美術の道を志し、金沢美術工芸大学へ入学しました。専攻は彫刻でした。

美術を学ぶうえで、自然を観察することはとても大切です。そこから物事の不思議さや、美しさ、怖さを感じる心を培い、翻って自分自身や周りの世界への洞察が深

まっていたように

思います。大学卒業後も自然に関わる仕事に身を置きたいと思い、林業を選びました。

まずは、ハローワークや県森連で話を聞き、林業に従事する形として「森林組合や林業事業体へ

の就職」があることを知りました。そして、県内の組合に「作業員として働かせてください」と直談判して回っていた中で、津幡森林組合（合併し、現在は金沢森林組合）に採用されました。当時、津幡森

小学生の植樹体験。こっやってキノコが出来るなんて、自分が子どもの頃は全く知りませんでした



林研活動は、幼少期に森林と接してこなかった私にとって、日々の暮らしと林業との関わりを知る貴重な場となりました。また、森林施業プランナーとして高齢の森林所有者さんと接する中でも、森林と生活が密接に結び付いていた時代を肌で感じるがあります。「子どもの頃、親と一緒に自分の山の木を伐り出して、この家の柱を挽いた」「焚き木や山菜を採つ

森へいざなう 林研活動

林組合の従業員のほとんどが河北林研のメンバーだったこともあり、私も当然のように河北林研に入りました。



松本拓也さん。「未来の自然と子どもたちのための林研活動を！」



木工教室。山から集めた材料が、子どもたちの想像力でいろんなものになっていきます

たりすることが毎日の遊びだった」といった話を聞くと、そこには「人間が生活をする」ことの大本になる大切な心構えがあるように思えます。自分が森林・林業を通して得たことを子どもたちも得られる環境にしたい、そんな思いで林研活動に取り組んでいます。

林研では、夏休みに小学生対象の木工作教室を実施しています。山でいろんな種類の枝や面白い木の実を集め、枝は輪切りにして乾かして、工作の材料を準備します。心がけているのは、大人が誘導しないこと。一見扱いにくそうな材料でも構わず混ぜて、子どもたち

森の中の 神秘を伝える

がのびのびと創造力を発揮できるよう意識しています。私が、一番やりがいを感じている取り組みです。

私には、また別の活動の場があります。

踊り手として舞台に立つことです。大学生活終盤、自身の表現が次第に彫刻から踊り「舞踏」と呼ばれる前衛舞踊へと移っていき

ました。今も師のもとで舞踏家として精進している日々です。

昨夏、森の中の野外公演で子どもたちにも舞踏を観てもらおう機会を得ました。舞台道具も自然の大径木などを利用して準備しました。森に潜む得体の知れない気配や静けさ、霽^{もよ}がかかったり晴れ渡ったり、そういうはっきりと区別できない世界が自然の中にあるという



森の中の舞踏公演。じーっと観ている子、「こわーい」と泣き出す子、様々な反応がありました（2018年9月にも金沢で本格的なソロ公演を行い、無事に終了しました！）

ことを子どもたちに感じてもらいたいと思いました。

これらの活動を通して自分できめることは何か、考えながら楽しく学び、未来の自然と子どもたちのために貢献しようという奮闘する、そういう林研活動でありたいと思います。

＊まとめ

河北郡林業研究グループ
松本拓也

事

私たちのチャレンジ！

例

よりリアルに！ 小学生の測樹・間伐体験

ごじょうめ

五城目森林組合林業研究グループ「秋田県」

小学校へ連携を提案

私たち五城目森林組合林業研究グループは会員38名、森林・林業を活かして地域を活性化し、次世代に繋げていくための活動に取り組んでいます。

平成26年度より、町の小学校に通う小学5年生を対象に「林業体験教室」を実施しています。小学



班で話し合いながら樹高と胸高直径を目測



胸高直径の測定。班のリーダーが計測し、会員がサポート



伐採後にメジャーで樹高を測定

校で森林・林業に関する授業を行っている」と聞き、林研グループとの連携を提案したことがきっかけです。森林や林業について、よりリアルに学べるよう「森林の働きと林業のしくみ」の講義後に、植樹、測樹・間伐、シイタケ・ナメコの植菌といった林業体験を実施しています。測樹・間伐体験について詳しく紹介します。

木を測るゝ目測と実測の比較
事前に児童の班分け（1班5～6人）とリーダーの人選をしてもらい、各班に会員の1人がサポートにつきました。また、クマの出没対策として、消防署に当日の監視を依頼しました。
木の値段は樹高・直径・材質（曲



現場で打ち合わせを行う
林研メンバー

がり）、量（材積）で決まるため、伐採前の測樹の重要性について児童にまず話をしました。胸高直径は輪尺で、樹高は伐採後の木の長さを巻尺で測定するので、輪尺と巻尺の使い方についても児童に説明しました。

次に、間伐体験で伐採する木を

利用して、材積計算に必要な樹高・胸高直径を児童が目測しました。目測値は、班で話し合って統一見解を出します。児童たちは、自宅周辺の木を日常的に見ているものの、木の高さや太さに注目するのは初めての体験なので戸惑いながらも、自由に発言していました。

それから、目測した木を実際に伐採し、班のリーダーが会員と一緒に輪尺・巻尺で実測した後、目測値との差異について児童同士で話し合いました。胸高直径は目測とほとんど違いはありませんでした。樹高は、1本目は目測と実測に大きく差が出ましたが、2本目では慣れて、差が2m位まで近づいた班もありました。

間伐体験では、間伐前と間伐後の林分の違いが分かるように、会員が選木や伐採の説明と実技を行いました。

体験後に届いた感想文には「木を測る専門の器具があることに驚いた」「木の伐採生まれて初めて見て、その迫力に興奮した」「掛



シイタケ・ナメコの植菌体験

かり木にならないように受け口を作って方向性を定め、クサビを打ちながら伐倒する様子に感動した」「自分で植えた木を将来自分で伐採してみたい」といった意見が多くありました。

植菌体験が 広報誌の表紙に

植菌体験では、ブナ・ナラ・クリ・サクラ・スギの苗を植樹しています。植栽地は町民の憩いの場である森山公園の車道脇で、植樹を行った児童が自分の



成長を見守れるよう、公園の車道脇に植栽

植えた樹木の成長を見守れるように配慮しました。

植菌体験では、ホダ木にドリルで穴を開け、鋤でシイタケやナメコの種駒を打ち込みます。植菌した45cmのホダ木は観察用として児童が自宅に持ち帰り、90cmの長いホダ木30本は学習教材として学校へ寄贈しています。この平成28年度の植菌作業の様子が町の広報誌の表紙を飾り、児童のよい思い出となるとともに、全町民にアピールできました。

地域に根ざした活動を

ほかにも、毎年開催される町の



町の産業文化祭で、広葉樹の苗木を無料配布

産業文化祭では、広葉樹の苗木100本〜150本を無料で希望者に配布しています。愛着を持って育ててもらえるよう、苗木一本ごとに樹種名を記した名札をつけています。

今後も引き続き、未来を担う子どもたちをはじめ住民を巻き込みながら、地域に根ざした活動を地道に続けていきたいと思っています。

＊まとめ

五城目森林組合林業研究グループ
事務局 畠山 徹

事

みんなの人気者

例

京都府北部の
林研グループで
活躍中

与謝地方林業研究会
(以下、本会)は、京都府の北部、日本三景の一つ天橋立を有する宮津市と隣接する伊根町、与謝野町に在住の林家を中心に構成された林研グループで、学術的にも貴重な地元の天然杉群「上宮津スギ」の保全や地域の育林活動の指導など積極的に活動しています。

指導林家である吉岡徳雄さんは、本会で長年活躍されています。現在、80歳。まだまだお元気で、その活動は林研のメンバーのお手本となっています。今春に林研主

林研会員のお手本として活躍中！ 与謝地方林業研究会「京都府」／吉岡徳雄さん



吉岡さんが一人で建てた小屋。
中は畳・ストーブ完備



チェーンソー・キノコ研修での玉切り



現在 80 歳の吉岡さん

催で実施した広葉樹大径木の活用を図る「チェーンソー・キノコ研修」では、チェーンソーでの玉切り作業や植菌を率先して行うなど、活動には欠かせない存在です。

優良な山づくりの お手本として

本会では、地域の健全な森林の育成や施業意欲の向上を目的に、昭和51年から、3年に1度、育林コンクールを開催していますが、



丁寧に整備された
「おふくろの森」

前回のコンクールでは、吉岡さんの所有する森林が最優秀賞を取りました。

吉岡さんのお母様が嫁いだ際に持参され「おふくろの森」として名付けられたこの森は、丁寧に森林整備が実施され、材の搬出用に吉岡さん自身が開設した作業道が入っています。



本会のメンバー。中央左が吉岡さん、右端が製材した岡本さん

また、吉岡さんはこの森で伐った木を同じ林研仲間の岡本さんに製材してもらい、所有林内に立派な小屋を一人で建てました。小屋の中は、畳敷きで、ストーブが設置され、とても居心地の良い空間になっています。それ以外にも、重機を格納する小屋や製材した材を保管する小屋もご自身で建てています。

高校生の指導者として

7～8年前からは同じ林研仲間の矢野さんと一緒に、黒炭も焼いています。1回の窯入れで200kg近い黒炭を生産しているそうです。

今年から、吉岡さんと矢野さんお二人が講師となり、近く

の宮津高校フィールド探究部の部活動の一環として、高校生たちに木の伐採から製炭までを教えている

とのことでした。お話を聞かせていただいた時も、高校生たちが顔を真っ黒にさせながら窯から出した黒炭の袋詰めを行っていました。



宮津高校の生徒たちと黒炭の袋詰め

この活動は、今年から3年間続く計画で、秋には、製炭だけでなくシイタケのほだ木づくりも指導する予定だそうです。

これからも、ますます活躍が期待される吉岡さん。山が好き、暇があれば木を見に行く、広葉樹の森づくりも取り組んでいく、と、まだまだバイタリティ溢れる言葉に、林研会員一同、吉岡さんのように頑張って活動していきたいと思います！

＊まとめ

事務局 井上亜紀子

平成30年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
北海道	北海道林業グループ協議会	岩見沢農業高校、帯広農業高校、旭川農業高校
青森県	青森県グリーンマイスター協議会	五所川原農林高校
宮城県	仙南フォレストクラブ	柴田農林高校
	鳴子林業研究会連絡協議会	小牛田農林高校
	津山町林業研究会	古川工業高校、石巻工業高校
秋田県	北秋田森林・林業振興会	秋田北鷹高校
山形県	山形県林業グループ連絡協議会	村山産業高、置賜農高
	★庄内林業研究会（8頁）	庄内管内の高校生
福島県	★館岩地区林業振興協議会（36頁）	
	田人林業研究会	
茨城県	茨城県林業研究グループ連絡協議会	大子清流高校
栃木県	栃木県林業振興協議会	鹿沼南高校
	日光地区木材流通研究会	ICSカレッジオブアーツほか
	日光市林業振興会小来川支部	
	今市里山育成会	宇都宮大学等
	大田原市林業振興会	宇都宮大学等
	みかも千年の森づくり会	那須拓陽高校等
群馬県	★NPO法人フォレストぐんま21（12頁）	宇都宮大学等
	特定非営利活動法人 林業倶楽部山屋	前橋工業高校
千葉県	千葉県林業研究会	君津青葉高校
東京都	特定非営利活動法人 青梅林業研究グループ	多摩工業高校
神奈川県	なかい里山研究会	
富山県	富山県林業研究グループ協議会	富山工業高校
	魚津地区林業研究グループ協議会	桜井高校
	★砺波地区林業研究グループ協議会（16頁）	南砺福野高校
石川県	富来林業研究会	志賀高校
	穴水町林業研究会女性部	
	加賀林業研究会	
	能登町林業研究クラブ	
山梨県	山梨県林業研究グループ連絡協議会	山梨県立農林高校
長野県	長野県林業研究グループ連絡協議会	県下高校
	佐久林業士会	佐久平総合技術高校
	上伊那林業士会	上伊那農業高校
	南信州林業研究会	下伊那農業高校
	木曽林業研究グループ連絡協議会	木曽青峰高校、林業大学校
	長野市中条地区林業研究グループ	長野西高校中条校
	特定非営利活動法人 北信州の森林と家をつなぐ会	下高井農林高校ほか

平成 30 年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
岐阜県	加子母優良材生産クラブ	森林文化アカデミー
	高根町林業改良クラブ	飛騨高山高校
愛知県	愛知県森林協会林業研究グループ分科会	安城農林高校、猿投農林高校、田口高校
	愛知県指導林家連絡協議会	
	額田林業クラブ	
三重県	★三重県林業研究グループ連絡協議会（20 頁）	久居農林高校
	熊野林星会	紀南高校
京都府	京都府林業研究グループ連絡協議会	北桑田高校
	樹々の会	
奈良県	奈良県女性林業研究グループ連絡協議会	
和歌山県	和歌山県林業研究グループ連絡協議会 女性林研部会	りら創造芸術高校、南部高校龍神分校
鳥取県	鳥取県林業研究グループ連絡協議会	智頭農林高校
島根県	特定非営利活動法人 もりふれ倶楽部	松江農林高校、出雲農林高校
山口県	山口県林業研究グループ連絡協議会	山口農林高校、萩商工高校
徳島県	★かみやま林業振興会（24 頁）	城西高校神山分校
愛媛県	愛媛県林業研究グループ連絡協議会	西条農高、伊予農高、上浮穴高校
福岡県	★黒木町林業振興会（28 頁）	八女農林高校
	京都森林研究グループ	行橋農林高校
	福岡県林業研究グループ連絡協議会	女性林業者への安全研修会の開催
長崎県	長崎県林業研究グループ連絡協議会	諫早農林高校
熊本県	上益城地区林業研究グループ連絡協議会	矢部高校
	八代地方林業研究グループ連絡協議会	八代農高泉分校
	球磨地区・普及林研グループ連絡協議会	南校高校
	芦北地域林業研究グループ	芦北高校
	天草林業研究グループ連絡協議会	
大分県	★大分県林研グループ連合会（32 頁）	日本文理大学
宮崎県	門川町林業研究グループ連絡協議会	門川高校
	椎葉地区林業研究グループ連絡協議会	
	西諸県地区林業研究グループ連絡協議会	
	美郷町林業研究グループ連絡協議会	
鹿児島県	鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	伊佐農林高校
	知覧町たけのこ振興会	薩南工業高校

★は、本情報集第 1 部で紹介しているグループ。グループ名の下に数字は紹介頁をさす。

編集スタッフ———白石 善也
石井 圭子
斉藤 恵巳
高橋 香織
吉田 憲恵

レイアウト———森本 唯

装丁———クリエイティブ・コンセプト（根本眞一）

平成 30 年度
多様な担い手育成事業

体験から学ぶ知恵と技 地域の担い手を応援する林研活動情報集

発行———2019 年 3 月 15 日

発行者———齋藤 正

発行所———全国林業研究グループ連絡協議会(全林研)
〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル
電話 03-3583-8407
FAX 03-3583-8465
webサイト <http://www.ringyou.or.jp/rinken/index.html>

編集———全国林業改良普及協会

印刷・製本所———株式会社シナノ

Printed in Japan

- 本書に掲載される本文、写真のいっさいの無断複写・引用・転載を禁じます。
- 著者、発行所に無断で転載・複写しますと、著者および発行所の権利侵害となります。